

京都・火の祭事記

～伝統行事からみた森林資源と人のつながり～



薪<炭<KYOTO 編

はじめに

私たち『薪く炭くKYOTO』は、地域の森林資源のエネルギー利用を進めることで、持続可能な循環型社会の実現にアプローチできないだろうかと考え、活動を展開している。しかし、現代の日本人の多くがそうであるように、私たちは日常生活において木材を燃料として使っておらず、使っていた経験を持つものも少ない。森林資源を燃料、エネルギーとして利用するにあたって、どうすれば資源の持続性を確保することができるのだろうか？ 持続的利用と収奪的利用のラインは？ はたまた人間は森林とどのようにつきあっていけばいいのだろうか？ 分からないことはあまりにも多い。そこで私たちは、「火の祭り」に着目した。

私たちが生活の舞台にしている京都には、火に関連した祭が多い。鞍馬火祭、五山送り火、北山各地の松上げ、狸谷山火渡り祭、伏見稻荷の火焚祭……。これらの祭では近くの森林から伐ってきた木材を燃やすことで、祭の主役である火を生み出している。私たちの暮らしから失われてしまった森林利用のあり方が、「火の祭り」のなかに今も色濃く残っているのだ。私たちは、かつての森林との付き合い方を色濃く残している「火の祭り」を通して、先人たちの知恵を拝借しようと考えた。そして、謙虚に私たちの生活のあり方を見直そうと思う。

上記の目的のもと、この1年間京都で行なわれている火の祭りを様々な角度から見てきた。その成果を、まだまだ中途半端な状態であることを承知の上で、ここに『京都・火の祭事記～伝統行事からみた森林資源と人のつながり～』という冊子にまとめた。

冊子の構成は、2部構成になっている。第1部では、京の夏を彩る「五山送り火」の一つである「大文字送り火」に焦点をあて、詳細に調査・検討を行なった。大文字送り火に焦点をあてた理由の一つに、送り火で燃料として使われているアカマツの薪が全て大文字山に自生しているアカマツを用いているということがある。一つの山という系のなかでまさに「循環型利用」が成立しているのである。しかも、この「循環型利用」は祭りが成立してから500年ものあいだ「持続的」に続けられてきたのである。しかし、この「循環型利用」は、

急激に変化している社会のなかで持続し得るのだろうか、持続するためには何が必要なのだろうか。私たちは、調査を進めるにあたり、「大文字送り火は、森林資源と人的資源の双方が維持されて、初めて持続可能となる」という仮説を立て(図1)、「森林資源」と「人的資源」の二つの視点から検証した。また、私たちが実際に体験してきた送り火の準備や点火の現場の様子および送り火の運営主体であるNPO 法人大文字保存会の会員の方の思いも併せて報告する。

第2部では、京都府下の火の祭りを、簡単にではあるが調査してきた成果を報告する。具体的な内容としては、実際に7つの火の祭りを視察し、祭りにおける「火」について、実際に祭りを体験してきた感想を交えて報告する。さらに、京都府下のおもだった火の祭礼・行事をリストアップし、催される月日と場所、簡単な紹介を添えた。場所については概略を地図に示した。この暦と地図を参考に、読者が実際に足を運んでいただけたらと思う。

以上が、本冊子の目的と構成である。まだまだ中途半端な調査報告ではあるが、薪く炭くKYOTOでは今後も京都府下の火の祭りについて調査・検討を深めていきたいと考えているのでご容赦願いたい。また、有益なご指摘・ご指導をいただけたら幸いである。

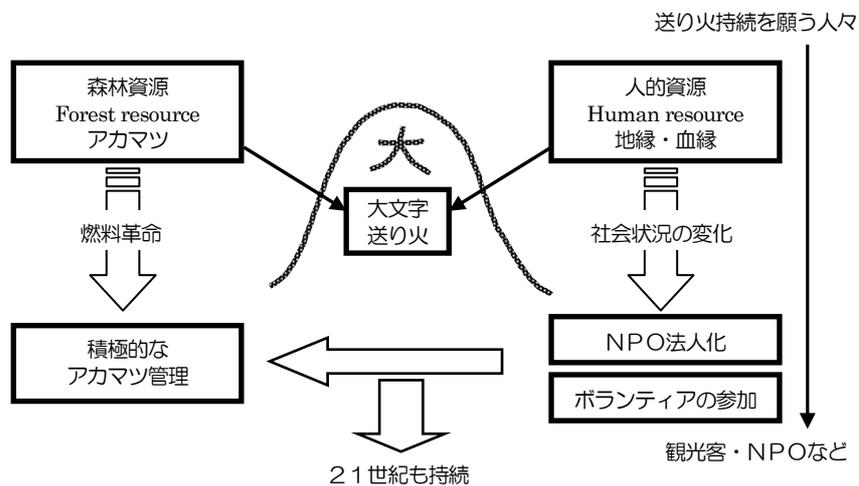


図1 作業仮説

(嶋田俊平)

(中表紙)

1. 大文字送り火の今昔

毎年8月16日に京都盆地の周囲の山に「大」「妙法」の字や鳥居、船を形どった火が次々に点火され、京都の夏の風物詩になっているのが五山送り火である。葵祭、祇園祭、時代祭とともに京都四大大行事の一つに数えられる五山送り火、その代名詞にもなっているのが、左京区東山如意ヶ嶽（正確には如意ヶ嶽の前山となる大文字山 456m）に灯される「大文字送り火」である。大文字山山腹北西面の海拔 300m前後に置かれた75箇所の火床に火が灯され、縦 100m、横 130mの大の字を闇夜に展開する。

今では夏の風物詩として有名な大文字送り火であるが、その起源や由来は、はっきりとは分かっていない。初めて文献に大文字送り火が登場するのは、公家の舟橋秀腎の日記「慶長目件録」の慶長8年（1603年）の7月16日のところに「鴨川に出て、山々の送り火を見物した」と記されているのが最初となる。ただここでも「寄り道がてらに見物した」ようにうかがえ、いつから始まったとは書かれておらず、この時にはすでに、お盆の風物詩となっていたかのような感じを受ける。また、1600年代半ばになると、関ヶ原の合戦も終わり、すっかり天下大平となった日本では一大旅行ブームが起り、江戸では多くの旅行案内書が出回るようになり、その中に「大文字送り火」が数多く登場している。しかし、この時にはすでに、大文字の起源は謎になっており、その起源をいろいろと考察、議論する書物も出回り始めていたらしい。江戸時代初期から、いろいろと研究されはじめた大文字の起源であるが、その中でも代表的なものが、「平安時代初期の弘仁年間（810～824年）に弘法大師が始めた」というものと、「室町時代中期に足利義政が始めた」というものであるが、京都では「弘法さんが、はじめはったんや」といういわれをよく耳にする。

また、なぜ「大」の字なのかも実は謎のままである。諸説としては、（1）もともと大という字は、星をかたどったものであり、仏教でいう悪魔退治の五芒星の意味があったのではないか。（2）一年を通して位置の変わらぬ北極星（北辰）は神の化身とみなされており、その北極星を象った大の字を、同じく動かぬ山に灯したのが、そもそもの大文字送り火の起源ではないか。（3）弘法大師

1. 大文字送り火の今昔

は、大の字型に護摩壇を組んでいたところから、大の字にしたのではないかなどがある。

このように、500年以上も脈々と継承されてきた大文字送り火であるが、常に安泰な道を歩んできたわけではない。日本が近代国家を目指し始めた明治期には、祖先の霊を送るための「大文字送り火」は疫病神を払うための「祇園祭」とともに迷信とされ、10年間禁止された時期があった。その後、再開はされたが、資金難に陥っていたという。送り火は、明治以前には、現存する五山の他に、「い」、「一」、「竹の先に鈴（竿に鈴）」、「蛇」、「長刀」の合わせて十山で行われていたが、資金難等の理由で昭和初期（第二次世界大戦前）までに次々となくなり、現在の五山（「大文字」、「妙法」、「船形」、「左大文字」、「鳥居形」）になった。五山送り火はこのような苦難の時代を経ている。

しかし、現在は、戦後の文化財や伝統保護の機運の高まりを追い風に、大文字送り火は大きな注目を受けているといえる。送り火が灯される8月16日の夜には、京都市街には京都市民だけでなく、日本各地や海外からも大勢の観光客が訪れ、夜空を焦がす壮大な精霊送りの炎を見つめ、過ぎゆく夏を惜しむ。送り火が綺麗に見える場所として人気の高い、今出川通りの鴨川三角州にかかる今出川大橋は、浴衣姿の若者などで溢れかえり、交通整理の警察が出ているくらいである。京都府警の発表では、2003年8月の送り火には約16万人が市内の大路や鴨川沿いに集まっていたという。

参考文献

京都ガイドブック <http://kyoto.nan.co.jp/>
hi-ho <http://home.hi-ho.ne.jp/>
京の祭礼と行事 http://www.kanshundo.co.jp/museum/gyoji/gyoji_20.htm
久山喜久雄 1991 大文字山 ナカニシヤ出版

（嶋田俊平）

2. 大文字送り火の現場から

2-1. 大文字送り火を体験して

2003年8月16日、私たち薪く炭くKYOTOの調査チームは、NPO 法人大文字保存会のご好意で、大文字送り火の準備段階から点火までの過程を見学させていただいた。その見学で見聞きしたことを以下に報告する。

調査メンバーは午後3時に大文字山の登り口に位置する八神社に集合した。神社には、境内からあふれんばかりの人が集まっていた。「大文字保存会」という帽子や法被を着た年配の方、ボランティアとして参加する大学生、走り回る子どもなど老若男女問わず様々である。大文字送り火は、「大」の字が灯される山腹の共有林の所有者である47家を中心とする山麓の住民（現在はNPO 法人大文字保存会として組織化されている）によって長い間継承されてきた。送り火が行われる半年前の2月から始まる伐採、薪割り、草刈、登山道の整備等の作業もすべてこれらの住民総出で行なわれてきた。しかし、特別点火された2001年幕開け事業の記念送り火（ミレニアム点火）から、大文字保存会の会員以外に、多くの若いボランティアが作業を手伝うようになっている（これについては、4章で詳細に述べる）。ミレニアム点火時には事前準備から当日運営まで約75人のボランティアが関わり、彼らの多くが今でも準備にボランティアとして参加しているということである。また、毎年多くのボランティアが新たに加わっているという。

この日も多くのボランティアが集まっていた。彼らが大文字送り火を一目観たい、手伝いたいと胸を躍らせて集まってきたことは彼らの表情から容易に察せられた。皆で談笑しつつ汗をかきつつ、火床に向かう登山道を登る。この登山道も日頃から大文字保存会のメンバーが崩壊箇所の修繕や手すりの設置などの維持管理をされているということであった。登山道は次第に急な階段状となり、それを登りきったところで視界が開け、大の字に出た。既に大勢がこまごましく働いていた。私たちも火床に薪を配分するなどの手伝いをした。

大の字を形作る火床は、如意ヶ嶽の前山にあたる「大文字山」の山腹に北西

2. 大文字送り火の現場から

に向いて作られており、海拔 300m前後に位置する。先述したように、この土地は大文字保存会の会員である 47 家の共有林である。そして、そこには火床が 75 箇所設置されており、縦 100m、横 130mにわたって大の字を形作っている。火床はひし形に削った大谷石で、土中に埋め込まれている。地表部分は縦 90cm・横 15cm・高さ 20cm 程度で、対にして利用する。字形の中心部を特に金尾（かなわ）と呼び、4 基の火床からなる。字形の頂点も字頭（じがしら）と呼ばれ、2 基の火床で構成される。この火床の上に、アカマツの割り木で井桁を組む。これらのアカマツは、全て大文字山に生育しているものを利用している。昔はアカマツが豊富に生育していたので困らなかったであろうが、近年は松枯れなどの影響でアカマツが減少しているため、アカマツの苗木の植栽・保育を行なっているそうである（写真 ①）。また、伐採されたアカマツは、幹や枝は割り木として、松葉は割り木の間に挟み着火剤として用い、幹枝葉を全て利用していた。毎年 25 本程度を伐採し、約 500 束の薪を用意する（写真 ②）。

井桁は樹齢 30 年から 40 年の松（松割り）を使って組み上げ、すき間には丹念に松葉を埋め込む（写真 ③）。配分される松割りの数は火床の位置、年度によって異なるという。通常は 3、4 束、50 本前後の松割りをを用いる。護摩木は最初の点火用として用いられる。この護摩木は 15 日正午頃から 16 日昼頃まで銀閣寺門前で受け付けされており、人々は先祖の供養や願い事を記す。薪の積み方、松葉の差し込み方には様々な知恵が見られた。京都の夏の風物詩になった送り火には何十万という目が注がれるので、失敗は許されない。井桁は、遅くとも点火 2 時間前には組み上げて、最終検査に臨む（写真 ④）。あとは午後 8 時の点火を待つのみである。

午後 7 時。山上の弘法大師堂でお燈明が灯され、大文字寺（浄土院）住職および大文字保存会員並びに参詣者等の有志より般若心経があげられる。薄暗くなり始めた空に般若心経が広がり、吸い込まれていく。

午後 8 時。京都の街を見下ろすと店舗や民家の灯りが消され、いつもの半分くらいまでライトダウンされていた。お堂から聞こえてくるお経が徐々に高まってきているような錯覚を覚えた。突如掛け声が始まった。「下の流れはよいか



①アカマツ植林地



②保管されている薪



③井桁を組む



④完成した井桁



⑤燃え上がる井桁



⑥火をみつめる人びと

ー」「東はどうかー」「西はどうかー」。そして、「よーし。よーし。」の返事を合図に「大」の中心部である金尾の前で、お堂の灯明から火が移された大たいまつが左右に大きく揺れた。点火の合図である。各火床の担当者が火を入れると一気に炎は2m以上にも燃え上がった。火の大きさは想像以上で、見物客もその熱さに後ろに下がらざるを得ない(写真⑤)。あるものは草陰に隠れ、あるものは石垣にへばり付いた。山全体に上昇気流が起きているようでもあった。私たちはその火の迫力にただ呆然とするしかなかった(写真⑥)。やがて、その火が点火時の轟々としたものから安定期に入り、私たちも心のこわばりが解け、下界に目をやった。京都市内のいたるところからカメラフラッシュが瞬いていた。鴨川・賀茂大橋では、大勢の人が押し合いへし合いしているのだろうかと思いを巡らせたりもした。

午後8時10分、右手の闇夜にゆっくりと「妙」と「法」が浮かび上がった。同15分、続いて「船形」がゆらゆらと現れた。何か星空へ船出してしまいそうであった。同じ頃、正面の奥に目をやると「大」が浮かんでいた。金閣寺付近に灯される「左大文字」である。やや遅れて、同20分、鳥居がかすかに見えてきた。五つの火のネオンがささやかに輝く京の街をぐるりと反時計回りに囲んで灯っていく様は、目の前の炎にたじろいでいた心に落ち着きを取り戻させてくれた。やがて、字は崩れ、あるいは薄くかすれていき、8時45分には大方消えた。あちこちで、見物客が燃え残った炭を持ち帰る光景が見られた。下山する人の列ができはじめた。私たちも登ってくるときと比べるとやや無口に大文字山を下り始めた。

(嶋田俊平)

2-2. 大文字送り火へかける思い

＝ NPO 法人大文字保存会・長谷川さんへのインタビュー ＝

500年、600年とも言われる歴史を持つ大文字送り火は、大文字山の山麓住民の手によって綿々と続けられてきた。大の字が灯される部分の土地を共有地という形で所有しているのもこれらの住民である。現在はNPO法人大文字保存会としての組織形態をとって送り火の運営を続けている。この大文字保存

会の副理事長である長谷川綉二氏に大文字山や送り火の昔と今の在りようや、送り火にかける思いを聞かせて頂いた。

この8月の送り火の感想を聞かせて頂けますか。

毎年のことだけど、今年は良かったと思ったことは無いですね。灯るのは当たり前のことだし、怪我が無いのも当然のことでしょう。何が難しいかという、全ての火床を一斉に点火させることです。点火の指示と同時に火が入らない火床や、灯かないところもあるからです。そのようなときは、近くにいる役員や保存会員が応援に行



NPO 法人大文字保存会 長谷川綉二さん

くことになる。また、点灯時間を保つのも難しいですね。次に妙法の送り火が灯るまで20分程度あるので、その間こちらの火を綺麗に維持したいと思っ

ているのですが、火床によっては井形に組まれたものが崩れてしまうところも出てきます。これは井形の組上げのときにしっかりと安定した積み方をしていないから10分としないうちに崩れてしまうのです。だから、毎年なにかを反省しているという訳です。

井形の組方や松葉の添え方、火の入れ方等には神経を使いますね。下で見ている人には分からない事と思いますが、後で愚痴を言うてくるのは会員の親か親族ですよ。麓で見ているおばあさんが、自分の子や孫が灯す火床の位置を知っている、なかなか灯らない時などは「もう、恥ずかしいわ。どうなっているのやろか。」と心配したりしています。

子供のころと比べて今の山や生活の様子にどのような変化がありましたか。

山も生活も随分と変わりましたね。私たちの幼少の頃は山が大文字山が庭であり

活動の拠点だったと思います。学校から帰れば当然のように山で遊んでいましたよ。山には四季折々のおやつがあったし、遊び道具もありました。年長の人から教えてもらっていろいろな遊びをしたりしましたね。

その当時は家には「おくどさん（かまど）」があって、それで煮炊きをしていました。祖父や祖母と山に下草や薪を取りに出かけて、それを背負って帰り、かまどで炊いたり、お風呂の湯を沸かすのに使っていました。そう、いまから約50年位前までそのような生活でした。しかしその後、ガスや電気が普及してからは、各家庭でかまどを取り壊し、薪を使わなくなったのですね。それから、この東山にはアカマツが沢山生えていて、私たちが中学校時代くらいまで、マツタケが採れていたと思います。家のお祝い事などで出される料理の中に山で採れたマツタケや山菜が皿に盛られていたよ。とにかく、山には生活に必要なとする食べ物、燃料、肥料等がなんでも揃っていました。それだけでなく、祖父母や両親、兄弟でそれぞれの力量に合わせて協力しあう生活がそこにはあったと思います。

そういう生活のなかで大文字送り火はどういう位置付けでしたか。

幼少の時で物心がついたときには、ごく自然にやっていたよ。「なぜ、やっているの？」ではなく、特に意識もせず当然のこととしてやっていました。送り火のために特別に何かをするというのではなく、家ではご先祖を迎え仏間飾りをして、そして盆にご先祖をお送りするために大文字に登り、送り火を灯します。その時期になれば、家庭や地域の行事として準備をはじめていました。各家には送り火前になると薪や麦の束が用意され乾燥等の作業をしていました。そして、当日までに大人たちは山道の補修や火床の修復に出かけるのですが、人手が必要なときは家族で出かけましたね。私はまだ小さかったので父親とお茶沸かしをしていたのを覚えています。お昼になると母か姉が山までおにぎり弁当を運んでくれたと思います。当日も父や兄のベルトにくくりつけたタオルを握って背には弁当の入ったリュックを背負い登ったのを覚えています。

まあ、個々の家での出来事と生活が教えたり教えられたりせずして、自然と身についているのでは無いでしょうか。京都には祇園祭があるのですが、鉾町

に生まれ育った人たちも育った生活の中で自然と身についていたので、伝統や文化といった大そうな理由付けはいらわないのだと思います。

だから、私たちは送り火を灯すのが当然なことで、逆に灯さないのはご先祖やその他の御霊に対する生活を変えることと同じことだと考えています。

これからはどういう形で大文字送り火が続いて行ったらよいと思いますか。

そうだね、今の私たちにとっては生活の一部ですが、これからは、新しい趣旨とか意義付けを加えて行くことが必要だと考えています。山も生活も随分昔とは変わりましたからね。

昔はこの山にもトンボやチョウチョ、それにサワガニがいたことを教えたいし、そのような山に戻したいと思っています。そして、昔は沢山あったウドやアケビ、クルミといった木の実を復活させて、子供や孫が誇りにできる山になって欲しいと思います。

また、人間だけでなくサルやイノシシ、シカといった、山で生活する動物たちと共生できる山にもしたいですね。そういう森に戻して行くことが山の送り火を残すことにもつながると考えています。

実際山に人が入らなくなって放置していたら、アカマツはどんどん少なくなってきました。たとえアカマツがあっても、周りに雑木が茂っているために伐採したくても取り出せない事態になりつつあります。そのまま放置していると、10~20年の間に送り火の燃料が不足することになるでしょう。もともとはアカマツが沢山生育していた山ですから、その山を生かして植林しながら再生していくことが今後の課題だと思っています。先ほども触れましたが、伐採と植林する上で考えなければならないのは山の生態系です。動物との関係、植物との関係も考慮しながら、子供や孫にこれからの山のあり方を伝えられればと思っています。

それと、大文字の山だけ考えていたのでは限りがありますね。隣地の山主とも一緒にやっけて行くことも必要です。銀閣寺の寺社地や法然院の院地、霊願寺地所などとも関連しながら山を守る、といった発想で考えて行かなければと考えています。「自分は自分、他人は他人」ではなく、こっちの山との共生、あっ

ちの山との共生という具合に考えていって、最終的にはこの東山全体をどう考えるかというふうに持っていかればいいですね。その中にたまたま大文字が灯される山があるというのでいいのです。

大文字送り火という伝統を守る喜びについて教えてください。

大文字山と送り火を通して、いろいろな人と出会いましたね。京都という街のこと、伝統文化のこと、森林のことなど、さまざまな話題や考えを持った人たちと交流して感じたのは、皆、同じ事を考えていることです。街も文化も自然も一体だと私は思っていますから。私は、送り火をテーマに、いろんな人たちを通して町から文化へ、文化から自然へと火を送り、仲間を増やして行くことに喜びを感じます。毎年新たな人たちが訪れてきて新しい課題を与えて帰って行かれます。

私が思うに、送り火を灯すことの意味は、敬ってもらうことです。あの火を見て御先祖や友、先に逝かれた方たちを敬う気持ちが生まれることが大切なのです。

2001年幕開け事業の記念送り火に参加したボランティアの感想文の中に「僕たちはこの火の元に手を繋げた。今知り合った75名が手を繋げて火を灯したというのは、僕たちにとってものすごく大きな力になりました。もっともっと、この火を絶やさず灯し続けたい、だから送り火の火とともに僕たちの心にも灯し続けることをもっと広げたい」というのがありました。この感想文を読んだとき、たった一度の触れ合いで、このように感じてくれる友がいたことをうれしく思いました。このように思ってくれる人がもっともっと増えることを望むと同時に私たちより先に送り火を灯されたような思いがしました。

長谷川さんの人生のなかで送り火というのはどういう位置付けなのでしょう。

今の歳になって感じるのですが、ご先祖を敬う、尊敬するというのは、そのようなことが生きるうえで何かと支えになってきたからではないかと思うのです。子供や孫にはそのような心は受け継いでもらいたいと思いますし、自分自身のご先祖だけでなく、幾多の文化や伝統を守り、自然を維持されてきた方々

に対して感謝することも忘れてはならないとも思います。

特に京都の文化と伝統は、災い事や応仁の乱などで混乱した時代にも負けずに継承されてきたのですが、それを担ってきた人たちの力は敬って余りありません。送り火も500~600年もの間どのようにして継承されたかを考えると、ほんとうによく続けてこられたと思います。一方で、これから500年続けるだけの事業を残せるかを考えたとき、今の私には自信が無いとしか言いようがありません。しかし自分が生きている時間の間だけでも、しっかりと継承して行きたいと思っています。そして、それだけでなく送り火の持つ意義と価値観を現在に沿う形として継承することを考えていくことも自分の任務です。

これからは、次世代に継承していく立場ですが、継承するだけでも10年はかかるでしょう。表面上は単純に見えても心の問題は時間がかかりますね。古さの中にもしっかりと受け継いでもらわなければならないところもありますが、そうでない新しくして良いところはこれから一緒に作り出したいですね。

やるからには責任もあり、逃げることもできません。私も若いときは、そのようなことを特に考える気持ちにもなりませんでしたが、いまになって思えば5~10年早くに何事もやっておけばよかったと後悔しています。

だから、あなた方の年代から伝統とか文化にたずさわるのなら先の人たちを敬い、感謝する思考を持って活動してもらいたいと思います。

これはなかなか難しいことだけれど、やはり持って欲しいですね。

(構成：嶋田俊平)



3. 森林資源からみる大文字送り火の持続性

はじめに

大文字送り火に使われる薪は、すべて大文字山に生育するアカマツでまかなわれている。1度の送り火のためにアカマツ 25 本が伐倒され、約4 tの薪が使われる。

最初に示すのはこのアカマツ 25 本の熱量がいかに少ないか、ということである。使用されるアカマツを生産するための労働エネルギー、また燃焼時に発生する熱量など送り火を行うために消費されるエネルギー量と、現代の私たちの日常生活におけるエネルギー利用レベルとを比較検証する。

次に示すことは、逆にこのアカマツ 25 本が実は貴重なものである、ということである。使用エネルギーの観点から見てわずかなものであっても、アカマツを持続的に生産するためには、適切な森林管理を積極的に行うことが必要であると予想される。後半においては、まず歴史的に見て日本の森林植生がいかに人間活動の影響を受けて変化してきたことを文献を元に整理する。そして最後に、今後も大文字山のアカマツを燃料として、送り火を持続的に続けていくための森林管理に関してささやかな提言を行う。

3-1. 大文字送り火のLCA評価

LCA（ライフサイクルアセスメント：Life Cycle Assessment）とは、原材料の採取から製造、使用及び廃棄にいたるすべての過程を通じて、製品が環境に与える負荷の大きさを定量的に整理、評価する手法である。従来は主に工業製品の環境負荷の定量化に用いられてきたが、近年愛知万博の開催計画などにもその概念が適応されるようになってきている。

工業製品のLCA評価を行うには、データベースを元に複雑な計算が必要となるため、素人には難しい。しかし、大文字送り火のように、森林資源と人の労働力のみを頼っている場合、計算は比較的容易である。本項においては、LCA評価の概念に従い、大文字送り火の「原材料の採取から製造、使用及び廃棄にいたるすべての過程」における消費エネルギーを環境負荷と見なして計算

することにした。

◇消費エネルギーの算出方法

(1) 森林資源

送り火の前日と当日に、薪・松葉・護摩木などの燃料の量を調査した。調査にはばねばかりを用いた。薪の束の重さを使用 390 束中、50 束を用いて測定した。焚き付けには松葉が用いられている。松葉は束になったものと、ビニール袋に入れられたものの2種類があった。束については20 サンプル、袋については9 サンプル重量を測定した。護摩木の箱の重さはばねばかりで測定した。

薪の使用量は聞き取り調査によった。松葉と護摩木の使用量については、当日その数を数えた。各燃料の使用量に各燃料の単位重量当たりの発熱量(三浦・西田 1993)をかけ、送り火全体の発熱量を算出した。今回は松葉の発熱量のデータが得られなかったため、松葉の発熱量は送り火全体の発熱量には含めなかった。

(2) 労働力

送り火の準備に投入された労働力をカロリー計算した。送り火の準備はほとんど手作業で行われている。人間の1日の消費カロリーは約 2500kcal であり、肉体労働をするとそのうち約 1000kcal が消費される(石川 1993)。当日までの準備に関わった人のべ人数は聞き取り調査を元に算出した。当日の準備に関わった人については目測で人数を数えた。

(3) 機械

薪などの資材運搬にはリフトが使用されているが、聞き取りによれば30年以上使われているということで、建設のために投入されたエネルギーは償却されていると仮定して、消費エネルギーの計算には含めなかった。リフトを運転するためのエネルギーに関する調査は今回行うことができなかったため、今後の課題としたい。今回はリフトのモーターを30kW、運転時間を作業工程の聞き取り調査から年間10時間と仮定して概算結果を示す。1Wは0.86kcal/時間として計算した。

またアカマツの伐採に使用されるチェーンソーの消費エネルギーも今回調査

できなかったが、概算結果を示す。アカマツ1本あたりを伐採するのにかかる時間（経験的に約1.2時間）をチェーンソーの運転時間とした。チェーンソーの単位時間あたりの消費燃料量を10cc/分とした。また燃料には石油を用いているとし、石油1Lあたりの発生エネルギーは8400kcalとした。

（4）廃棄物

LCA評価においては、廃棄物の環境負荷も定量化する必要がある。大文字送り火において、途中で排出される廃棄物には、薪製造時のアカマツ残材と、送り火終了後の消し炭がある。

薪を採取した後の残材は林内に放置され、やがて分解される。大文字山において循環的な森林資源の利用が行われれば、分解時に放出される二酸化炭素も無機養分も、次世代の樹木に吸収される。したがって、薪の残材の環境負荷量はゼロとしてもよいだろう。

消し炭は魔除けになると言われているため、送り火終了直後から翌朝にかけて、人々にきれいに拾われてしまう。消し炭が魔除けに使われる過程での環境負荷を追跡するのは困難である。しかし、送り火の環境負荷に炭の二次利用を含める必要はないだろう。したがって、消し炭の環境負荷もゼロとすることにする。

◇計算結果

（1）薪の使用重量と発熱量

薪・松葉（束・袋）および護摩木の使用単位あたりの重量の測定結果を表1に示す。

表1 各燃料の単位別重量

種類	形態	平均[kg]	サンプル数	標準偏差	最大[kg]	最小[kg]
薪	束	10.5	50	0.7	12.8	9.0
松葉	束	2.2	20	1.1	5.2	0.9
松葉	袋	3.8	9	0.9	5.1	2.4
ごま木	箱	5.6	—	—	—	—

表2に送り火に用いられる薪の配置ならびに、その数をまとめた。各点につき薪は5束が原則であり、中心のみ20束の薪が用いられる。火床の数から考えると焚き付けの松葉は、束なら1点に1束、袋なら1点につき0.5袋使われ

たと思われる。護摩木は1点につき1箱が用いられ、中心のみ多めに使われていた。

表2 大文字の薪束の配置数

画	火床数a	各火床の束数b	小計c
第一画左	8	5	40
第一画右	10	5	50
第二画上	9	5	45
第二画下	20	5	100
第三画	27	5	135
中心(金尾)	1	20	20
合計	75	45	390

*各画の薪束数は火床数×各火床の薪束数とした：c=a×b

表3に送り火に使用された燃料の量を種類別に示す。合計は4.7tにものぼるが、そのうちの4.1tが薪で占められていることが分かる。

表3 送り火に使用された全燃料の量

種類	束・袋・箱数	重量[kg/束・袋・箱]	合計[kg]
薪(束)	390	10.5	4095
松葉(束)	61	2.2	134
松葉(袋)	9	3.8	34
ごま木(箱)	80	5.6	448
合計	—	—	4711

表4に送り火における、燃料(薪・護摩木)の発生熱量の推定値を示す。送り火には他に焚き付け用に藁が使われているが、今回の調査では使用量がわずかであるとして省略している。

表4 送り火における発生熱量

種類	樹種	使用量[kg]	発熱量[kcal/kg]	小計[kcal]
薪	アカマツ	4095	3970	16.3×10^6
ごま木	スギ	448	4980	2.2×10^6
合計	—	—	—	18.5×10^6

(2) 送り火のために投入された人の労働エネルギー

聞き取り調査によれば、送り火の準備には47家族が平均10日ボランティアとして参加している。多めに見積もって、1家族平均して毎回2人が作業に

参加したとすると、のべ参加者数は； $47 \times 2 \times 10 = 940$ 人・日である。

また当日の参加者は聞き取り調査では約 150 人ということであったが、当日人数を数えたところ 288 人だった（28 ページ：図3）。ここでは把握できなかった分もまだあるとして、多めに見積もり 300 人が当日の準備に関わったと仮定する。

1 回の送り火の準備に、年間のべ 1200 人が関わったとしよう。石川（1993）によれば、肉体労働を行ったときの人間の消費エネルギーは約 1000kcal である。

したがって送り火のために投入された人の労働エネルギーは、
 $1200 \text{ (人)} \times 1000 \text{ (kcal)} = 1.2 \times 10^6 \text{ kcal}$
 と推定された。

（3）機械の消費エネルギー

リフトの運転に使われるエネルギー量は以下のように概算された。

$$30 \text{ (kW)} \times 10 \text{ (時間)} \times 0.86 \text{ (kcal/時)} \times 1000 = 0.26 \times 10^6 \text{ kcal}$$

チェーンソーの運転に使われるエネルギー量は以下のように概算された。

$$1.2 \text{ (時間)} \times 25 \text{ (本)} \times 10 / 1000 \times 8400 \text{ (kcal/L)} = 0.15 \times 10^6 \text{ kcal}$$

したがって機械の運転に消費されるエネルギー量はリフトとチェーンソーを合わせて、

$$0.41 \times 10^6 \text{ kcal}$$

と推定された。

（4）送り火に使用される総エネルギー量

送り火に使用される燃料の発生熱量は約 $18.5 \times 10^6 \text{ kcal}$ 、その準備のために投入される人の労働エネルギーは約 $1.2 \times 10^6 \text{ kcal}$ 、機械の運転に消費される燃料は $0.31 \times 10^6 \text{ kcal}$ であると推定された。したがって、大文字送り火の

表5 送り火に使われる全エネルギー量

種類	発熱量[kcal]	割合[%]
燃料(薪)の発熱量	18.5×10^6	92.0
労働エネルギー量	1.2×10^6	6.0
機械の運転に用いられるエネルギー量	0.4×10^6	2.0
合計	20.1×10^6	100.0

ために消費される全エネルギーは、約 $20.0 \times 10^6 \text{kcal}$ であると推定された(表5)。

◇考察

送り火に使われるエネルギー量と現代人の日常生活におけるエネルギー使用レベルとを比較した。現代の日本において1人あたりの年間のエネルギー消費量は $10 \times 10^6 \text{kcal}$ である(石川1993)。一方、1回の送り火に使われる総エネルギー量は約 $20.1 \times 10^6 \text{kcal}$ であった(表5)。したがって1回の大文字の送り火は、現代日本人わずか2人分の年間消費エネルギーだけで営まれている計算になる。

祭りをを行うための主要な消費エネルギー源であるアカマツの薪などの木質バイオマスエネルギーは、化石燃料と違って、再植林などが行われれば再生可能なエネルギーである。また次世代の樹木が成長する過程で、大気中の二酸化炭素を吸収するので、カーボンニュートラル(大気中の二酸化炭素量を増加させない)であると言える。LCA評価の観点からも、非常に環境負荷が小さいとまとめることができるだろう。

また祭りの準備は主に人の労働力によってまかなわれ、一部リフトやチェーンソーなどを使用している。今回は推測による値を示したが、その割合がわずかなものであるとの結論は揺るがないだろう(表5)。

五山の送り火を見るために集まる人は約16万人(京都府警調べ)と言われている。わずか2人分の消費エネルギーで、16万人の人が真夏の夜に酔いしれる祭りが行えるということを考えれば、このイベントが極めてエネルギー効率のよい、エコロジカルなイベントであると言ってよいだろう。

3-2. 東山の森林植生の歴史

送り火のための薪を供給してきた大文字山であるが、その植生は近年大きく変化したものと思われる。かつて東山全体で普通に見られたアカマツ林は、近年こんもりとした照葉樹林へと遷移が進行している。さらにマツ枯れの進行がそれに追い討ちをかけている。アカマツの材蓄積量は減少し、将来薪が不足することも予想される。大文字送り火が21世紀もその伝統を受け継いでいくた

めには、大文字山のアカマツ林の持続的な管理が必要になってくると考えられる。ここでは東山の森林資源の持続的な管理のための基礎情報として、森林植生と人との歴史を簡単に振り返ることとする。

(1) 奈良・平安までの古代の略奪期

奈良・平安時代は古代王朝の権力が巨大建造物として誇示された時代である(タットマン 1991)。そのために原生的な森林において、まずは巨木が抜き切りされた。とくに都の近くであった畿内において、とくに略奪は激しかったとされる。スギ・ヒノキ・サワラなど天然生の巨大な針葉樹はこのころまでに、ほとんど伐採されたと考えられている。

(2) 室町後期から江戸後期までの東山の植生

京都市近郊では大文字送り火が始まったと言われる室町時代後期(13c.)から、アカマツ林が目立つようになったと言われている(小椋 2000a)。小椋(2000a)は絵図等の歴史的資料を解析することによって、京都市郊外の森林植生景観の変化を明らかにしてきた。それによると、室町後期から江戸後期まで、京都東山は一貫して薪炭林として利用されてきた。つまり木質バイオマスのエネルギー利用によってアカマツ林が成立していたと考えられる。その結果、大きな樹木は主にアカマツしか残らず、しかもその数は少なく樹高も低かった。また大文字山から比叡山にかけての植生はとくに高さが低く、ほとんど植生がないハゲ山も存在した可能性もある。

(3) 明治中期から昭和初期にかけて

明治期になると、淀川の治水問題などによって国家権力による森林の保護政策が取られるようになる。伐採、火入れ、草刈りなどに関する規制が相次いで出された。またスギ・ヒノキなどの植林も積極的に行われるようになった。その結果、森林資源の蓄積量は増加し、草地などはほとんど見られなくなった(小椋 2000b)。

京都近郊には、現在の五山の送り火以外にもかつては送り火が存在したと言われているが、伝統が途絶えてしまったものも多い(小椋 1996)。市原で行われていたと言われる「い」の字の送り火は明治中期に姿を消した。その理由はいくつか考えられるが、小椋(1996)は国有林の樹高が高くなり、京都市

内から送り火が見えなくなってしまったことが最大の原因であると考察している。都市部の人間の視線が山の活動を支えていたことの好例であろう。大文字においても「大」の下部の一部が銀閣寺国有林のヒノキによって市内から見えなくなっており、林野庁に伐採の要請がなされているとのことである。

(4) 戦後から現代

戦後から現代にかけてほど、日本の森林景観が劇的に変化した時期はない。この変化をもたらしたのは、一つは燃料革命、二つ目はスギ・ヒノキの拡大造林政策である。私有林である大文字山においては、燃料革命により薪炭利用が放棄されたことがより重要である。

アカマツ林は落葉の収奪利用や柴刈り等により、土壌が貧栄養になる場所で成立する(只木 1988)。しかしこういった人為的な有機物の持ち出しが停止すると、土壌に養分が蓄積し、潜在的植生である照葉樹林へと遷移が進行する(宮脇 1991)。

また、京都近郊でも 1980 年代の後半からマツ枯れ被害が拡大し、京都大学上賀茂試験地ではわずか 3 年の間にアカマツ林が半減した(二井 1999)。大文字山でもアカマツ林から、シイなどを中心としたより原生的な常緑照葉樹林へと遷移が進んでいる。

3-3. 持続的な森林資源供給のためのアカマツ林管理

(1) アカマツ林の生産量

アカマツ林の生産量には以下のような報告がある。

・ 15 年生のアカマツ林 (堤 1989)

地上部純一次生産量=14.9t/ha/yr、幹生産量=6.8t/ha/yr

・ 20~22 年生のアカマツ林 (岩坪 1991)

地上部純一次生産量=6~20t/ha/yr、幹生産量=3.6~12t/ha/yr

一般的にアカマツ林はやせた尾根部に成立する。日本における森林の純生産量は8~20t/ha/yr の範囲にあり、アカマツ林は中程度の生産量を示す(堤 1989)。択伐を想定して毎年 4t の薪を生産するならば、アカマツ林が約 1ha

あればよいことになる。保存会が所有する大文字山は約 12ha あるそうなので、純粋なアカマツ林施行を行えば、必要な生産量は比較的容易に確保できると考えられる。

大文字山では約 40 年生のアカマツが伐採されていることが、聞き取り調査によって明らかになっている。京都府の地位別のアカマツ幹材積成長量によると、成長量はいずれの地位においても、30 年から 35 年生の間にピークがあり、40 年生を超えたあたりで急速に低下する（図 2）。したがって、約 40 年生で伐採するのは理にかなったことだと考えられる。

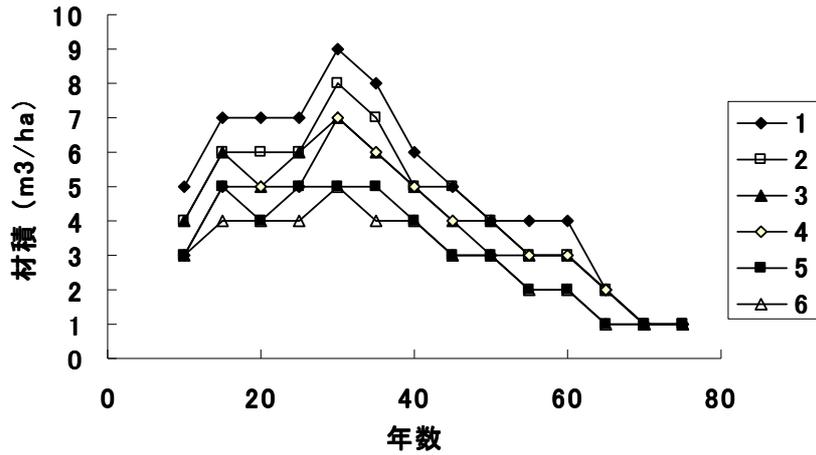


図 2 地位別のアカマツの幹材成長量の経年変化
(京都府林業便覧・京都府林務課)

(2) アカマツ林施業

アカマツの適地は、土地がやせており、風通しがよく乾燥した場所である。適切な作業を行えばアカマツの再生は可能であるが、これには次の二つの課題がある。

一つは、保全作業に多くの厳しい労働を必要とすることである。まず、マツ林に生えている雑木の抜き切りと、林外搬出を行う。次に地表に厚くたまって

いる堆積層を取り除く地掻きと、林外搬出作業を行う。この作業により、マツ林はマツの根に養分・水分を補給する役割を持つ菌根菌が生活できる環境となり、マツと菌根菌の共生関係が築かれ環境はさらによくなる。これらの作業は、1ha 当たり約 100 人・日が必要であり、施業の翌年からの萌芽刈り取り等の補整作業を続ける必要がある厳しい 3K の仕事である。

二つ目は、マツ枯れへの対処が必要であること。マツ枯れの要因としては、マツクイ虫の病害、地球温暖化、酸性雨、大気汚染などがあげられ、現在も大学・林業試験場などで調査研究が進められている。マツクイ虫の予防対策としては、マツの木に薬剤を注入する方法が行われ効果が認められているが、多額の出費を必要とするため、多くのマツ枯れをくい止めるには有効な対策となっていないのが現状である。

一般的にマツ枯れは、山の下層から中層さらに尾根へと進行する大きな流れがある。初期段階でのマツ枯れは、山の斜面に点在しているものの、やがて点の周辺に広がる。これを放置すれば伐採適期の成長のよいマツは下層部から約 10 年程度で殆ど枯れ、尾根筋に僅かに残るのが一般的な傾向である。この流れを遅らせ被書面積の拡大を少なくするためには、マツ枯れ木を早期に見付けて抜倒し、薬剤散布、焼却などの処理を行う方法が現在の主な対策である。

大文字山では、冬の間マツ枯れを伐採し、薬剤散布を行い処理を行っているので、夏場に山腹から目視点検を行った結果、他に比べてマツ枯れが少ない感じを受けた。マツ枯れの被害は、夏場の気温が高温になればなるほど大きいですが、林内の保全管理が行き届いておれば、病虫害の抵抗性が大きくなり被害が少なくなるものと考えられる。

また、マツの天然更新の面では、厚い堆積層があればマツの種子が落下してもあまり育たない。地掻きを行っておけば落下した種子が土地の上に確りと根を張りよく育つため、アカマツ林の保全作業の必要性がなお一層重要な要素となる。

今年度は比較的夏場の気温が低温であったため被害が少ない傾向であったが、今後、気候変動により急激な高温の年になることも予測されるため、今からマツ枯れ対策を重視した保全作業を行い、アカマツ資源の循環を保ち、大文字送り火は“アカマツ材の使用”を継承させる方向と、一方保全管理を行う効果と

しては、秋にマツタケなどのキノコが採れる山にすることも期待できる。

参考文献

- 石川英輔 1993 大江戸エネルギー事情 講談社文庫
コンラッド・タットマン 1998 日本人はどのように森をつくってきたのか 築地書館
小椋純一 2000a 絵図等からみた江戸末期から室町後期における京都近郊の植生景観（京都府レッドデータブックホームページ）
小椋純一 2000b 明治中期における京都府南部の里山の植生景観（京都府レッドデータブックホームページ）
小椋純一 1996 植生からよむ日本人の暮らし 雄山閣出版
只木良也 1988 森と人間の文化史 NHK ブックス
宮脇昭 1991 緑回復の処方箋 朝日選書
二井一禎 1999 アカマツ林における“マツ枯れ”被害の進展様式 森林研究 71:9-18
堤利夫編 1989 森林生態学 朝倉書店
岩坪五郎編 1991 森林生態学 文永堂
* 京都府レッドデータブックホームページのアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/intro/21cent/kankyo/rdb/index.html>

（相川高信・藺田 登）

付記 3章は、3節（2）が藺田、その他が相川の執筆による。



4. 人的資源からみる大文字送り火の持続性

はじめに

今回の調査は、大文字送り火を森林資源と人的資源の切り口で捉えている。ここでは人的資源としての人々により送り火が継承されてきた状況と、近年、生活環境、個人の価値観が変化している状況下で今後の継承についても考察する。

4-1. 年間の作業の流れと人のかかわり

詳細な作業工程は、表6の大文字送り火年間工程表による。主な作業の流れは、2月初旬に送り火に使う樹齢30~40年生のアカマツの木を約25本伐り、4月中ごろリフト山頂の倉庫で1年間乾燥させる。5月中ごろ1年前に乾燥させた薪を銀閣寺門前まで下ろし各家庭などで保管する。8月は、初旬に火床周りの下草刈りをし、点火前日の15日は大文字山の御堂の飾り付けなどの準備、点火当日の16日は、銀閣寺前の受付所から薪を山上に運び、各火床に配布し、井桁に組み上げる。

この作業を行う大文字保存会の中心メンバー約25名の方は、送り火の9ヶ月前から、ほぼ毎週末の土・日曜日に出役される。共有者47軒の年間ボランティア日数は約10日間と多く、奥さん方は弁当づくり、汚れた作業服の洗濯など一家総勢での関わり、また大文字山近郊での結婚などを通じた家と家の絆は、昔も今も変わらず、地域の人たちの労働と費用などを伴った努力と熱意で続けられている。

最近、この大文字保存会は、NPOの法人格（特定非営利活動法人）を取得し、法律のもとで大文字山を会員の共同所有の財産として位置付けたことと、行事自体が京都市の無形民俗文化財に登録された。また京都府・市文化財保護財団、市民参加のボランティア活動などのバックアップ体制が整い、より継続性が保たれるようになっている。

表6 大文字送り火年間工程表

作業内容	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
①送り火に使うアカマツの選定 樹齢30~40年を選定、長さ50cmに切断	随時作業	—								随時作業.....	
②薪割り 点火材の松葉採取		—										
③積み上げ乾燥 伐採場所			—									
④薪を山頂の倉庫に運び 1年以上乾燥させる				—								
⑤銀閣寺山門送りフトで下ろす 8月15、16日志納用					—							
⑥火床周りの下草刈り 山道の補修、点火用ワラ購入								—				
⑦護摩木受付所設営								15日 —				
⑧銀閣寺山門からリフトで山頂へ 割り木、護摩木、各火床へ手運搬								16日 —				
⑨火床で割り木、護摩木并けた組								16日 —				

4-2. 点火当日の火床担当人員

各火床の薪を積み上げる作業担当者は、作業の進み具合により変動すると思うが、図3の如く総勢288名であった。この人数は、進度が約30%と思われる時に各火床をまわり、目視点検をしたものである。

これらの火床は、家族単位で担当されており、そこには幼児、子供連れの火床もあったのでこの数字に含めた。但し、各火床を担当されている方に確認をしたものでないので、見学者の方も含まれている場合も考えられるため大雑把な人数と考えている。

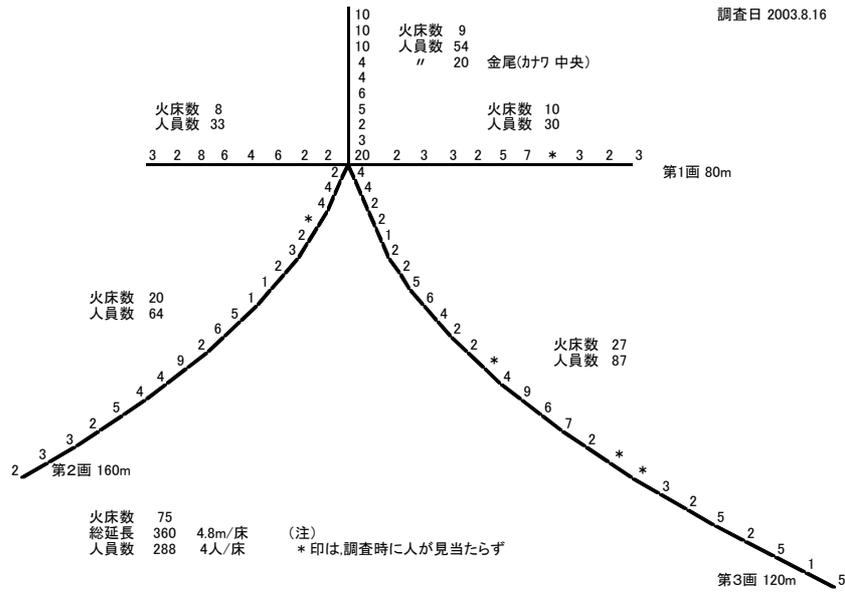


図3 大文字送り火・火床担当人員数

4-3. 送り火の継承・循環型社会

この調査を通じて感じたことは、幼児も連れて来られているところもあり、親の姿を見て、また少し成長した子供は積み上げるのを手伝い、積み上げた井桁に、孫が点火をし、それを見守る祖父など自然な形で伝統行事を受け継ぐ環境に育つ場がある。

このことは、いわゆる現代風に言えば、親と子の世代を超えた共生、薪を使った文化を継承する循環型社会が既に昔からあったことを気付かされ、学ぶことができた。

以上、まとめとして、この送り火が継承されてきた要因としては次のことが言える。

①自分の「家の誇り」が原動力の一つとなっていること。

②有形財産の相続、共有財産管理に有効なNPO組織が結成されていること。

大文字山は、大文字保存会の団体名義で財産登記がされているため、法律の基での手続きが簡単である。従来は47戸の相続人の印鑑など手続きが大変であった。

③日本人固有に持っている先祖を敬う心が存在していること。

京都の四大祭としては、5月の葵祭り、7月の祇園祭、8月の送り火、10月の時代祭りであるが、夫々特色があるが、そのうちでも送り火は、日本人が固有に持っている先祖を敬う心が火を通して今も生きている証であると思う。

④大文字送り火だけでなく五山の他の送り火の保存会との交流があること。

他の「送り火の山」との交流は、年に4回ほど幹部会が行われていることは、送り火の意義の確認などお互いの励みになり、いいことだと推測する。

⑤市民の大きな期待だけでなく公的機関からも送り火の意義が認識されたこと。

これまでの一時期に、補助金交付、残り火の管理責任、送り火を焚き火扱い、送り火をショウ的なイベントと軽い捉え方など保存会の熱意を逆撫でする状況があったが、“大文字の火を消さないで”との市民からの期待の声、寄付金などが寄せられたこと、その他公的機関からの補助金、職員の派遣など送り火の意義が世間で再認識され夏の一大行事として絶えることなく継続してきた要因であると思う。

⑥火床の担当の巡回など送り火の運営に工夫がされていること。

火床の担当は、1軒で2つの火床の担当だが永年同じ箇所ではなく、大の字の筆順とは逆の方向に毎年変わる。一巡すれば1年間休み待機する。このように火床を巡回することにも変化を与える工夫がされ、循環が組み込まれて

いる。

⑦火床の担当者は開放的で多様なグループの参加者で構成されていること。

火床の担当者の構成は、担当している家族だけでなく、地縁、血縁や知り合い、職場などの方が参加されているところもある。従来の伝統に加えて新規参入集団とも言える多様なグループ化の流れがある。

⑧送り火当日は大勢の見物客が応援団的な要素をもっていること。

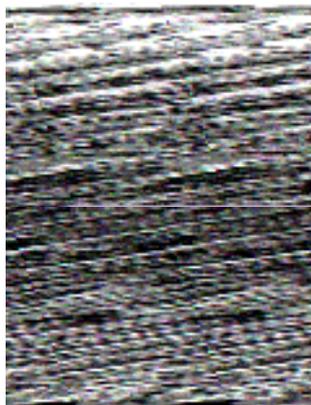
この火祭りの行事を市内の大路や鴨川沿いで16万人の応援団ともいえる見物客が、各自各様の熱い思いで眺めている。またテレビ観覧など全国でそれに数倍の方々がおられること。

このような光景は、時代が変わり人の価値観が変化しても火を通じた人的な資源循環は今後とも続き、継続されていくものと、この調査を通じて強く感じた。

参考文献

京都新聞 2003.8.3 なぜ?なにに探検隊

(藺田 登)



5. 総合討論「コモンズとしての大文字送り火」

5-1. コモンズとしての大文字循環モデル

私たちは調査を進めるにあたり、一つの作業仮説を立てた。すなわち、「大文字送り火は、森林資源と人的資源の双方が維持されて、初めて持続可能となる」という仮説である（2ページ：図 1）。そこで、3 章「森林資源からみた大文字送り火の持続性」において森林資源の、4 章「人的資源からみた大文字送り火の持続性」において人的資源の、持続性をそれぞれ検討した。

その結果以下のことが明らかになった。大文字山の森林資源アカマツ林は 600 年もの長きに渡り、送り火の薪を供給することで送り火の持続に貢献してきた。また今後は減少するアカマツ林資源を、積極的に管理していく必要があることも示唆された。一方、人的資源の維持に重要だったのは、地縁・血縁などの伝統的な人のつながりだった。それに加えて近年のNPO法人化や、ボランティアの参加などによりゆるやかに新しい主体へと移行していることもうかがえた。つまり、森林資源と人的資源の維持が、送り火の長期間の持続に貢献してきた、ということが明らかになった。

図 1 で示した仮説は、人的資源と森林資源から送り火へとそれぞれの矢印が向かう、単純なモデルに基づいていた。調査を進め、実際に送り火当日に参加することを通じて、「送り火」から「人」へ向かう強力な作用を私たちは実感するようになった。ボランティアの参加や、約 16 万もの見物客などもその効果を証明していると思われる。

そこで私たちは議論をもう一步先に進めるために、簡単なモデルを用いて新たな仮説を提唱したい。それは、送り火の実施が人的資源の充実を促進し、人的資源の充実が森林資源の適切な管理を可能にし、森林資源の適切な管理が送り火の継承を保証するという、正の循環（フィードバック）モデルである（図 4）。私たちはこのモデルを「大文字循環モデル」と名づけ、自然資源の持続的利用を介した、文化、産業、人的資源の循環を考えてみた。

次に私たちは図 4 で提唱した循環モデルそのものを、「コモンズ」として捉えることにする。コモンズという言葉は従来、入会地・共有地という意味で用い

られてきた。しかし近年では単なる入会地という意味を超えた有形・無形の「共有財産」として捉えられるようになってきている。また、これまでは利己的な振る舞いによってもたらされる「コモンズの悲劇」をどう回避するか、という文脈で用いられることが多かったが、近年では地域住民レベルでの自然資源を保全する有効な手法として、また地域共同体（コミュニティ）のあり方そのものとして、近年再び注目を集めている（コモンズ研究会ホームページ）。

これまでの論考に沿って、従来の入会地としての意味に近い、森林資源そのものとしてのコモンズのあり方と、人的資源との関わりから地域共同体としてのコモンズのあり方について、順番に考えてみることにする。そして二つの場合を考える際に、どちらもコモンズが「開かれた」存在であることの重要性を指摘したい。

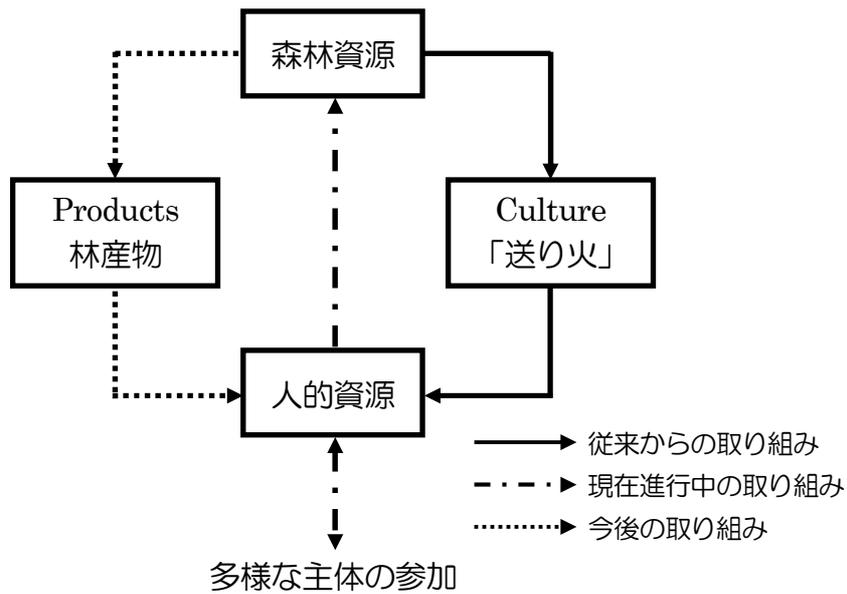


図4 大文字循環モデル

5-2. コモンズとしてのアカマツ林

3章で詳しく考察したように、大文字送り火は環境負荷の小さなエコロジカ

ルな祭事であり、必要なアカマツは地元大文字山から持続的な供給が十分可能であると考えられる。しかし現在大文字山においてはアカマツ資源が減少しており、森林資源を持続的に利用するための何らかの管理が必要になってくると予想される。

現在、NPO法人大文字保存会では、アカマツの植林を行うなどして資源の再生に努めている。アカマツは天然更新がもっとも容易な樹種である。かつて普通に見られたような伝統的な里山の管理をすれば、アカマツ林は容易に更新し、マツタケの収穫も期待できるかもしれない。幸いにして全国的に里山への関心は高まっており、行政はもちろん市民団体やNPOなどが管理を行うようになっている（武内ら 2001）。しかし管理活動の目的は「里山の再生」という具体性を欠くあいまいなものであることが多い。

その点、大文字山のケースは理想的であると考えられる。「送り火の持続」という明確な目標が存在する上、目標自体が持続的であるからだ。大文字送り火に使用される薪の量は年間約 4t であり、これは 1ha のアカマツ林の年間材生産量に等しかった。保存会が所有する私有地は約 12ha あり、アカマツ林施行を行えば、十分持続的に利用することができるだろう。

現在大文字山でも、アカマツ林からコジイなどを中心とした常緑照葉樹林へと遷移が進んでいる。このプロセスは人間の手が加わらなくなれば必ず進行する自然の営みである。西日本の潜在植生である照葉樹林は、これまで述べてきたようにそのほとんどが人間活動によって消失している。東山の照葉樹林は完全な原生植生ではないものの、まとまって発達した貴重なシイ林として捉えることができる。中でも銀閣寺町のシイ群落は「群落を維持するためには、ごく緊急に特別な対策が必要とされる」「要保全対策」に分類されている（京都府レッドデータブック・ホームページ）。

森林は多様な生物に食べ物や住み場所を提供している。生物多様性の維持という観点からは多様な森林のパッチが存在することが好ましい（武内ら 2001）。送り火の持続のためにはある程度のアカマツ林が必要であるが、その他の土地はまた異なったタイプの森林であってもいいはずである。大文字保存会、東山の他の森林所有者、東山に遊ぶ京都市民など、多くの関係者で「開かれた」議論を行い、バランスの取れた森林のあり方を検討していくべきであ

ろう。

5-3. 開かれたコモンズへ

続いて考察するのは、地域共同体（コミュニティ）としてのコモンズのあり方である。

日本の中山間地域では過疎化が進んでいる。かつては財産の継承といった血縁による「しがらみ」が過疎化の進行に一定の歯止めの効果を持っていたと言われている（奥田ら 1998、2001）。しかし90年代くらいから、こういった「しがらみ」から解放され、「住みたいところに住めばいい」という考え方が広がっているという。そのため今後ますます深刻化することが予想される過疎化問題においては、地域が「魅力的な住みたい場所」であることが必要になると予想される（奥田ら 1998、2001、山本ら 1998、立花ら 1998）。

奥田ら（1998、2001）、山本ら（1998）は一連の研究の中で、祭りなどの伝統文化が人のつながりの緊密化に寄与していることを明らかにした。また、農地からの収穫は産業であると同時に、親子間などの贈答を通じて人のつながりの一助となっている（山本ら 1998）。

岩手県沢内村においては、ボランティア活動のネットワークが村外・都市部にまで広がり、村のプラスイメージに大きく貢献していた（奥田ら 2001）。したがって、地域共同体をコモンズとして捉えた時に「開かれた」存在であることによって、多様な主体の関わりを可能にし、さらに循環の作用力を強めることができると考えられる（図4）。

近年大文字送り火の準備にはNPO法人大文字保存会のメンバー以外にも、若者を中心としたボランティアが多数参加している。ボランティアの貢献は大きく、また実際的な労働力としての効果以外にも、地元の若者へのよい刺激になっている、とのことである（長谷川氏の聞き取りより）。

地域共同体（コモンズ）を持続していくのが難しい時代である。大文字送り火の事例が示唆することは、地縁・血縁を基盤とする人のつながりだけではなく、関心を持つ多くの主体が自主的に関わることにより、人的資源を活性化させるということである。地縁・血縁の維持は大文字送り火の継承において重要

な役割を果たしてきた（4章）。しかし、地元47家族だけで送り火を毎年続けていくのは大変な負担であり、今後はこういった主体的なボランティアの貢献がますます必要となっていくと考えられる。地域共同体としてコモンズを捉えたときに、コモンズが多様な主体に向かって「開かれる」ことによって、コモンズ内の循環はより強力に作用するようになるだろう。

5-4. 大文字循環モデルの完成へ

私たちのモデルは、森林資源・人的資源（地域共同体）を単独にコモンズとして捉えるのではなく、それらの繋がり、輪、循環そのものをコモンズとして捉えるものである（図4）。

コモンズの循環（フィードバック）効果を高めるには二つの経路（パスウェイ）があると私たちは考えている。文化と産物の二つである。大文字送り火は、大文字山の森林資源を基盤とし、先祖を敬うという伝統を持ったすばらしい文化である。現在も地元47家族の共同体が維持されているのは、この送り火の持つ力の寄与が大きかったはずである。私たちは大文字というコモンズを維持・継承していくために、送り火（文化）の経路ともう一つ、産物の経路の重要性を指摘したい。

3-2「東山の森林植生の歴史」で概観したように、大文字山のアカマツ林は人々が木質バイオマスをエネルギー利用していたため成立していたと考えられる。大文字保存会の長谷川氏は、つい40年前まで大文字山が地元の人々にとって貴重なエネルギー供給源として機能していたと語ってくれた（2章）。

それだけではない。木の実も遊び道具も、マツタケも、トンボもチョウも。まさに「大文字山で全部生活していた」のだ（2章）。私たちがここで「産物」と言っているのは、何も経済活動だけではない。こういった日々の暮らしにおける形のある森や恵み全般のことである。一年に一度の送り火の裏で、こうした「産物」による日々の繋がりがしっかりと存在していれば、コモンズの循環の力はますます強固なものになり、大文字コモンズは確実に持続していくだろう。

大文字山においては、今後アカマツ林保全のためにその他の広葉樹などがあ

る程度伐採されることになるだろう。かつては「炊きもんになるもんは全部持って帰った」そうである。「産物」による繋がりを強固にするための一つの手段として、伐採される木質バイオマスを木材として、エネルギーとして有効利用することはできないだろうか。そういった活動を通じて、循環の力を強めていくことができるはずである。私たち薪く炭くKYOTOとしてもそこに注目していきたい。

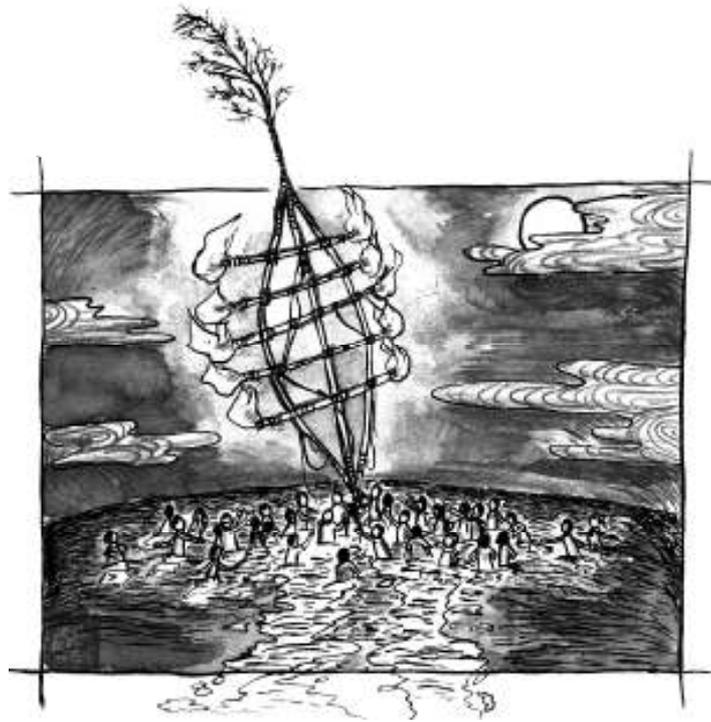
大文字山は東山の一角を占める代表的な山であり、京都市内のあちこちで、この「大」の字を見ることが出来る。まさに京都を代表する山である。毎夏行われる送り火は600年以上の伝統を持ち、しかも地産地消のエコロジカルな祭事であった。そして更なる持続を目指して、取り組みが始まっている。環境問題への対応から「持続的社會」がキーワードになった21世紀、森林資源と人間との関係を考える上で多くのヒントを与えてくれることは間違いない。調査はまだ始まったばかりである。今後も大文字送り火から目が離せそうもない。

参考文献

- 奥田裕規・立花敏・大松美帆・久保山裕史・横田康裕・井上真 2001 山村集落の生活を支える人的つながり-岩手県沢内村を例に- 日本林学会誌 83 (1) :47-52.
- 奥田裕規・井上真・安村直樹・立花敏・山本伸幸・久保山裕史 1998 親子の繋がりにからみた東北地方山村の現状と展望-遠野地域の山村集落を事例に- 林業経済研究 44 (2):37-42.
- 立花敏・井上真・安村直樹・奥田裕規・山本伸幸・久保山裕史 1998 人的つながりにからみた首都圏近郊山村の現状と展望-埼玉県大滝村を事例に- 林業経済研究 44 (2):67-72.
- 山本伸幸・井上真・立花敏・奥田裕規・安村直樹・久保山裕史 1998 人的つながりにからみた中国地方山村の現状と展望-島根県の山村集落を事例に- 林業経済研究 44 (2):79-84.
- 武内和彦・鷺谷いづみ・恒川篤史編 2001 里山の環境学 東京大学出版会
コモンズ研究会ホームページ
<http://freett.com/commons/index.html>
- 京都府レッドデータブックホームページ
<http://www.pref.kyoto.jp/intro/21cent/kankyo/rdb/index.html>

(相川高信)

第2部 京都の火の祭礼・行事



1. 京の火の祭事体験記

京都には、火の祭礼・行事が多数ある。最近、薪く炭くKYOTOのメンバーは、そうした京都の火の祭礼・行事のいくつかに参加、体験する機会があった。その体験記を紹介する。

1-1. 大文字送り火

「昔は大文字の送り火の後、仏前のお供え物を鴨川に流しとりました。橋の下でそれを拾う人もいて。うまくできとりました」タクシーの運転手が語る昔の大文字の様子は、何気に生々しいが、興味深かった。もっとそのお話を聞いたかったのだが、ちょうど土曜日に重なったこともあるのだろうか、銀閣寺道に入ってから車が全然前に進まなくなり、タクシーを降りて歩くことにした。

銀閣寺の参道はその日にもぎわっていた。大文字送り火では、護摩木に自分の名前と病名を書いて焚くとその病気が治るとされており、銀閣寺の前ではそんな護摩木の受付がされていた。

集合場所の八神社境内には、大文字保存会の事務所があった。「大」の字が灯される山腹は、山麓の住民の共有林とのことで、この共有林を所有する47の家族を中心に、山麓の住民によってこの京都の夏の風物詩が継承されてきたという。半年前から始まる準備は、そんな山麓住民によって担われているが、近年ではボランティアも増えているらしい。

京都にいたとき、大文字には何度登り、送り火を何度見ただろうか？ しかし、大文字に登って送り火を見るのなんていうのは初めての経験である。登山途中、千人塚で休みをとった。そこには、送り火で焚かれるアカマツが、乾燥に供されていた。今回の調査によると、毎年25本程度のアカマツを伐採し、約500束の割木が用意されるそうだ。こうした松割木や先ほどの護摩木は、主にリフトを用いて「大」の字が灯される山腹へと運ばれる。

見晴らしの良い山腹に到着すると、火床に松割木を積み上げる作業、消火用の水を準備する作業などが始まっていた。全部で75あるという火床に、それぞれ一家族くらいが単位となり、責任を持って松割木を井桁に組んでいく。さ

らに、松割木の間には燃えやすい松葉が挟み込まれ、その上にはあの護摩木が。あの「大」の字はそうした作業の合作なのである。「大」の中心部分にはとりわけ大きな井桁が組まれていた。「金尾（かなわ）」と呼ぶらしい。

やがて、金尾の前の弘法大師堂（小さな小屋なのだが）でお燈明が灯されると、般若心経が流れてきた。そして、8時前になると、京都のまちのあかりが次第に暗くなっていく。まちなかから山を見上げていても気付かないが、この夏の一大イベントのために、京都というまちが心をひとつにしているようだった。

午後8時、掛け声とともに一斉に点火。炎は一気に4、5メートルにも舞い上がった。激しく揺れ、煙とともに見物人を襲う。「あつい〜」悲鳴が上がる。直視できず、すこしずつ後ずさり。下界にはとても想像できないほどの強さである。アカマツが太陽からもらったエネルギー。そのエネルギーが今ここで熱く放たれている。同時に、京都のまちのいたるところからカメラのフラッシュがピカッ、ピカッ、ピカッ。「うわー」その瞬きは、地上の夜空のよう。しばらくして火の勢いが弱まると、北山に「妙法」、続いて「船形」「左大文字」「鳥居形」が浮かび上がってきた。これらの火床の形は、また違うようだが、その炎の強さは同じであろう。後ずさりする姿が、その遠い炎の中に浮かぶ。

やがて火はゆっくりと消えていき、年輩の方が燃え残った炭を拾っていた。この消し炭、粉末にして服用すると、持病が治るといふ。現在は魔除け・厄除けとして利用されているらしい。銀閣寺界隈の旧家の軒先には半紙で包んだ消し炭が吊されているらしいので、今度注意して見てみたい。

（橋本征二）

1-2. 妙法送り火

2002年8月16日、私は妙法の「妙」の字の送り火を代々行なっている左京区松ヶ崎の今井家の好意により、今井家の丁場への点火を体験させて頂いた。妙法送り火の「妙」は、麓の涌泉寺が鎌倉末に天台宗から法華宗へ改宗した際、西山へ「妙」の字が点火されたことにより、始まったとされている。またそれ

と同時に、現在点火終了後に行なわれている題目踊・さし踊も始まったとされている。この送り火「妙」は、決まった家が代々行なってきたり、また町によって点火する場所が指定されている。私が体験させて頂いた今井家の町は、「妙」の字の女偏である“く、ノ、一”の「一」を担当する旧名辻ノ町（現在の中町にあたり、一部堀町、西町を含む）であった。「一」には23の火が灯されるのだが、毎年一つ又は二つずつ、書き順の方向へ担当の火の場所が変わる。一つ、又は二つというのは、その場所によって二つの火を担当することがあるからだ。私が参加した2002年度では、今井家は「妙」女偏の「一」と「少」が交わる火（「一」の終点）の一丁場を担当した。（2003年度では、「一」の字の始点であった。）

送り火当日の早朝、今井家の人と私は、送り火の準備のために薪などを持ち、「妙」（西山）へ登った。薪は一丁場につき2束と決まっており、事前に松ヶ崎妙法保存会から配られた木を今井家で割ったものであった。大文字とは違い、「妙」には鉄製の受皿火床があり、それに井桁に薪を積み重ねた。また、その薪の間に燃えやすい新聞紙や大鋸屑を入れた。この間に入れるものは、特に指定されておらず、準備をする各家によって異なるようだ。

点火前、「妙」では約19時20分～19時30分にかけて、麓の涌泉寺の住職が読経されながら、西山に向かわれる。点火をする人々は、そのお経を聞きながら「妙」へ登るのだ。そして、朝準備した薪に灯油（約2ℓ）をかけ、点火の準備を行なった。20時に大文字が点火され、その後、掛声と松ヶ崎簡易保険局のライトによる合図により、「妙」を点火。灯油をかけているため、炎は勢いよく上がった。送り火全体で「妙」という字になっているかどうかは確認できなかったが、その連なる火の様、火柱はとても美しく、また激しく映った。一つ一つの炎が、それぞれの家や人々の思いを反映し、空へ向かい燃え上がっているように思えた。

「妙」は昔、女人禁制であった。しかし時代が変わり、現在では、松ヶ崎妙法保存会から配布される法被又は手拭を身につけることで参加する事ができる。そのため今井家では、友人やホームステイをしている外国の人に京都の伝統を体験してもらおうと毎年、様々な人を「妙」に上げている。また、大文字では割木に戒名などを書いて燃やすという風習があるそうだが、妙では基本的にそ



大文字送り火
(堀本尚宏)



妙法送り火
(重枝誓子)



妙法送り火

の風習はない。しかし、一緒に点火した今井さんは毎年、友人や友人の親族の戒名を一緒に燃やしている。伝統祭事というと、昔ながらの厳しいしきたりや決まり事が想像されるが、時代とともに、また行なう人によって変化を遂げていくという側面があることを知った。しかしそれは同時に、送り火というものが、京都の伝統祭事としてよりも、送り火を行なってきた各家の伝統行事であるからではないかと思った。送り火は、各家の世襲によって新しい時代の人へと受け継がれ、行なわれていく。そして、その時々でそれぞれの思いや考えのもと、行なわれている。だからこそ、伝統祭事にもかかわらず新鮮な変化を遂げる側面を持ちえているのではないだろうか。

しかし残念なのが、薪がどこから手元に来ているのか、送り火のための資源状況はどうなのか、知っている人は少ないようである。資源までを考えた視野が含められれば、さらに発展した伝統祭事となるのではないだろうか。

(重枝誓子)

1-3. 芦生松上げ

平成15年8月24日、研究室の仲間4人で松上げを見物しに口芦生（くちあしゅう）に行った。松上げは、火の守護神として知られる、愛宕神社信仰の祈りが込められた行事である。小浜を起点として、南川を遡上し名田庄村に入り、周山街道の京都府京北町、美山町を経て、愛宕神社へと「松上げの道」がみられる。

会場には五、六軒の夜店が出ており、その付近に数十人ほどの村人が集まっていた。さらに十数人の観光客らしき人々もいた。提灯の並べられた道を登り、丘から会場周辺を見下ろしてみた。広大な暗闇の中に、夜店のある広場と道沿いに並べられた提灯の明かりが浮かんで見えた。さらに由良川の向こう岸に目をやると、煌々と燃える無数の松明の明かりが見えた。ここが今夜の松上げの舞台であり、男性だけが立ち入りを許される場所である。

そうこうしているうちに、周辺がざわめき始めた。向こう岸で、村の男たちが火のつけられた松明をくるくる回し、灯籠木の先端についた籠めがけて投げ始めた。この灯籠木は檜でできており、高さは20メートルを超す。一人ずつ

投げるのではなく、各人が自由に投げていく。松明が放物線を描いて落ちていく度に、観衆は「あ〜」と残念そうに声をあげた。

一時間程経過して松明が籠の中に入った。しかし、籠が燃え上がることはなく、誰かが懐中電灯で籠を照らすと、煙だけがもくもくと出ていた。今朝雨降ったから籠が湿ってるんちゃうか、と話し声が聞こえてきた。その後もどんどん投げ続け、籠に入っては消え入っては消えを繰り返した。合計8回も松明が入ったにもかかわらず、籠は元の状態のままであった。

9回目の松明が籠に入った。そして、瞬く間に籠は燃え上がった。籠に火がついてから崩れ落ちるまでの時間は一瞬であった。投げ始めてから火がつくまでの時間が長かったためそのように感じたのかもしれない。しかし、暗闇の中、空中で燃え上がる様子は圧巻であった。

今日は念願の芦生での松上げを見物することができて、本当に幸せな気持ちになった。来年も芦生の松上げを見てみたいと思い、遥々芦生まで足を運ぶ人々がいることだろう。

(中川宏治)

1-4. 久多宮の町松上げ

2003年8月23日、松上げが行われる正確な場所もわからなかったため、少し早めに現地を目指して車を走らせていた。午後の4時過ぎ、久多宮の町地区に入ったところで車を止められ、10分ほど待つて欲しい、と言われた。ちょうど松上げの準備中であった。10人程で「燈籠木（とろき）」を垂直に立ち上げる作業をしていた。

松上げの舞台セットといえる燈籠木は、高さ約10mの檜の丸太の頂きに、円錐形をした竹籠のような「笠（笠籠）」を蔓で取りつけたものである。直径約1.5m、高さ約1.8mの笠の中には枯れたスギの枝葉がぎっしりと詰まっている。

松上げは昔、女人禁制であったと後で知った。その名残もあってか、現在も準備は男手のみで行われているようだ。おそらく昔は全て人力で行われたにちがいないが、人手も十分であったであろう。しかし、相当な重量の燈籠木を立ち上げるには、高齢化過疎化の現在は重機が欠かせなくなっているようだ。



芦生松上げ
(中川宏治)



久多宮の町松上げ
(堀本尚宏)

久多宮の町は谷に沿って水田が細長く広がり、茅葺き民家などが20戸ほど点在する山間の小さな町で、同じ京都市内であっても私の住んでいる下京区の市街地とは全く異なる風景が広がる。松上げは毎年8月23日に、町の中央辺りの水田と小川に挟まれた細い道路脇の「燈籠木場」で行われる。

松上げの開始は午後8時。それまで久多の少し蒸し暑いのがどかな夕暮れを味わった。周囲がすっかり暗くなった開始30分ほど前に燈籠木場に戻ったが、付近には見物客と思われる2人組とカメラマンが1人だけだった。しばらくしてビデオカメラを持った取材チーム3人がやってきた。この取材チームが後に「炎」を台無しにしてしまうとは思ってもよらなかった。

15分ほど前になって、ようやく主催者の一人であろう老人がやって来た。道脇に背丈くらいの細い竹を突き刺し始めた。この竹は後に献灯用のものとわかった。本当に午後8時から始まるのだろうか、と思っていたら10分ほど前になってようやく地元の人達がそろそろと繰り出してきた。それでも主催者と見物客を合わせて5、60人ほどであろうか。

午後8時になると何の宣言もないまま、道脇に積まれていた枯枝に火が灯され、松上げは突然開始された。鐘と太鼓の単調な囃子が始まり、松明に火が灯され、道路脇に立てられた竹に供えられていく。燈籠木場周辺の情景がぼんやりと炎で浮かびあがった。主催者の姿も炎に照らされた。作業着に長靴、腰にはナタ、山の行事ならではの恰好だ。

火を灯す行事の魅力のひとつは、炎とそれによって映し出される情景の趣なのだろう、と感じた直後、取材チームのビデオライトが炎の灯りとともに、私の炎への感興も掻き消した。この後もビデオライトは炎の邪魔をし続けた。

しばらくすると、「上げ松」が笠をめぐらして放り投げられ始めた。上げ松は縄を結びつけた松明に火を灯したもので、振り回して反動をつけて燈籠木の先の笠に向かって放り投げる。なかなか笠に入らない。時々観衆の方にも飛んでくる。何度となく上げ松が放り投げられた後、ようやく笠に入った。火が灯った笠は次第に炎を増し、巨大な松明となって周囲を照らした。

笠が燃え尽きかけたところでクライマックスを迎えた。燈籠木が倒された。一気に燃え盛りながら倒れた炎の塊は地面に叩きつけられて飛び散った。一瞬の出来事であったが、ビデオライトを圧倒するほどの迫力ある炎であった。飛

び散った炎の残り火が集められると、穏やかな灯りとなり、見物客は去りはじめた。

ほんの30分ほどの事であったが、現代の生活では使うことが希になった、木が燃える炎を身近に感じることができたひとときであった。

(堀本尚宏)

1-5. 雲ヶ畑松上げ (中畑町)

雲ヶ畑は、京都市内を南北に流れる鴨川（上流に行くにつれ加茂川、雲ヶ畑川と名前が変わる）を溯った源流域に位置する静かな山村だ。面積2000ha弱、約80戸、250人余りが住んでいる。古くは天皇家の御猟場であり、また、京都市街への薪炭の供給地であった。戦後に大規模な杉・檜の植林がなされ、林業で栄えた時期もあったが、近年は林業だけで食べて行くのは苦しい状況と聞いている。また、薪く炭くKYOTOや関連団体の山仕事サークル杉良太郎（すぎよしたろう）が活動しているフィールドでもある。

「雲ヶ畑松上げ」については、山仕事の手伝いにいったときに地元の方からよく聞いていたのだが、これまで見たことがなかった。「雲ヶ畑松上げ」は、平安時代中期藤原氏との勢力争いに敗れ雲ヶ畑に隠居していた惟喬親王を慰める為に村人が行った火の行事がその起源ということであるが、明治時代復活後は他地方の松上げと同じく火除けと五穀豊穡を祈願する愛宕信仰の献火行事として行われているということだ。山上に木で文字型の櫓（やぐら）を組み、松明（たいまつ）をつけるそうだが、なんでも、そのやぐらの文字が毎年異なり、その文字は点火までは秘密にされているというのがなんともミステリアスで、興味をそそられる。聞いた話では、アポロが月面着陸した年は、「月」の文字が灯されたとか。さてさて、今年はどうな字が灯されるのだろう。

2003年8月24日午後7時過ぎ、松上げが灯される山の川向いの高台にある高雲寺にやってきた。お寺の境内には人がちらほら居るくらいで、拍子抜けするほど静か。対岸の山も真っ暗。まあ、のんびりしようということで夕涼みを楽しんでいると、7時45分位になるとようやく見物客も集まりだした。サンダルを引っかけた短パンのおっちゃんや、寝間着姿の男の子、涼しげな浴衣を着

た女の子など、何とも肩の力が抜けたいい感じ。8時点火と聞いていたのだが、火は見えない。そんなこんなでじらさっていると、おもむろに、松明を持った人が現れた。そのひとが、山に向かって火を振りながら「おーい、おーい」と叫んだ。まわりの見物客もそれに合わせて「おーい、おーい」と叫ぶ。すると、山彦よろしく、山からも「おーい、おーい」との声が聞こえてきた。火が一斉にとり始めた。といっても、字が点火されるのではなく、10から20くらい
の松明の明かりが、狐の嫁入りの様に、くっついたり離れたり、並んだり散ったりというようにゆらゆらとうごめいている。それが延々と続く。なんとも幻想的であった。地元の話では、3m四方程の檜を組み、100束余りの松割木の松明を結びつけて点火するという事なので、現場では村の若衆が熱くて重い松明をもって汗をたらしながら頑張っているのだろう。

「雲ヶ畑の松上げ」は地元の若衆が中心となって、準備から当日の進行までを担っているそうである。雲ヶ畑でも過疎化、特に若い人が集落から出ていくことが、問題になっているが、この夜はそんなことを思い出しながら、対岸の山中で頑張っている若衆にエールを送った。

20分くらいであろうか、「狐の嫁入り」が延々とつづく。いつまで続くんだろうと少々退屈気味になっていたところ。いきなりバンッと字が闇夜に浮かび上がった。歓声がわき起こった。私も、おー！と思わず声を挙げた。拍手も起こった。感動。今年、灯された字は「中」であった。どういう意味なんだろう。良くも悪くもなく中くらいってことか、中国のことかなどと、あちこちで議論に華が咲く。

やがて、松上げをあげていた若衆が境内に走って戻ってきた。晴れ晴れとした表情が印象的であった。皆、拍手で出迎えた。ようやく。頑張った。若衆のリーダーが「今年も無事良い火が上がって、皆お疲れ様でした」と挨拶をした。皆また拍手。そうだよな、確かに「良い火」だった。これまで何十年、何百年と、実りの多き年も少ない年も、厄の多き年も少ない年も、人々は変わらず、この日に「良い火」を上げることに心を注いできたんだなあ。一人でうなずいてしまった。これからも、毎年8月に雲ヶ畑で「良い火」が上がり続けることを祈らずにはいられない。

(嶋田俊平)



雲ヶ畑松上げ
(嶋田俊平)



二ノ瀬火焚祭
(吉田好宏)



1-6. ニノ瀬火焚祭

11月半ばというのに今年の秋は暖かく、暑がりの私はトレーナー一枚で出町柳から夕方5時過ぎの鞍馬行き快速に乗り込んだが、ニノ瀬野駅に降りた瞬間、おもわず肩がすくんだ。念のために持ってきたウインドブレーカーを着て、「薪く炭くKYOTO」のメンバー10名とともに、今回お世話になる地元で京都森林作業体験セミナーの事務局がある松本氏宅に集合した。セミナー主宰の橋詰さんからニノ瀬火焚祭の由来などの説明を受けたあと、少し時間をもらい会員の成田さんと松田さんが「薪く炭くKYOTO」の活動内容などをセミナーの方々にきっちりと紹介してくれた。

松明の出発場所である集会所の広場には、すでにやぐら型に組んだ大きな松の木が炎々と燃えており、火の周りに自然とひとが三々五々集まり、いつの間にか地元の子供たちもいっぱいきている。ひとりずつに松明が渡され、「これ何の木かな」、「外材ではないやろ」など薪く炭くらしい(?) 会話をしていると、松本氏曰く「今日のこの松明は、鞍馬で作られた松明です。鞍馬の松明(鞍馬の火祭りです使う手で持つ松明)は、赤松の木の幹の心材で作られています。幹の心材で作る松明は、真直ぐしていています。ニノ瀬の松明は本来、自然に枯れた赤松の根を山で起こして、その心材で作ります。ニノ瀬の松明は、材料が根なので、一片が短く曲がっていてごつごつした松明になりますが、燃え尽きるまで時間が掛かるので長持ちします。同じ枯れた松でも、松くい虫で枯れた松は、油が無くかすかすで松明の材料にはなりません。最近は赤松が自然に枯れる前に、松くい虫で枯れてしまうため、材料を集め難くなっています。」とのこと。松明は長さ30センチぐらいに小割りした松を蔓で束ねて長さ1メートルぐらいにしたもので、大人も子供も同じ松明を担ぐことになる。

「やぐら」が崩れ、豪快に倒れた松の焚き火を親火にして各自が松明に火をつけると、氏神さんの神社に向かっていざ出発。ニノ瀬の火焚祭は見物客こそいないがほぼ全員が祭り当事者で、参拝者になる。松明を持ち鞍馬川に沿いながら町中を一行になって練り歩くと、炎が川面にゆらゆらと映り、景色はまことに幽玄で美しい。鞍馬の火祭りが男性的な祭りとして表現するのであれば、この祭りは女性的な祭りといえるかもしれない。松明は火の着いているところから

脂分を吹きながら、どんどんと火力が強くなっていく。橋を渡るとき風に煽られて一気に炎の威力が増すとともに、隣にいた吉田さんの松明の火の粉が頭に降ってくる。出発前に「服に穴があくよ。」といわれた意味が分かった。やはり松明というのは、書いて字のごとく松という材料でないとこれだけの強い火力と持続力はないということがよくわかった。

坂を登りきり鳥居をくぐると大きな杉こだちの中に神社の拝殿があり、さらに石段を上ったところに本殿がある。本殿の周りには暗闇ではっきり見えないが大勢（80人ぐらいはいただろうか）の人が集まっている。ほどなく本殿において神主により祝詞が読まれ神事が始まると後方では、囲炉裏のある珍しい拝殿の中で火が焚かれ、その横で銅鑼と太鼓が交合に打ち鳴らされ、巫女がくるくと舞う。何ともいえず幻想的な雰囲気と炎の暑さで私は酔ってしまった。石段の下にいる薪く炭くのメンバーも、炎で顔を赤らげながらも神妙な顔をしている。区長さんが代表してお祓いを受け、この一年の感謝と来年の無事を祈念し、神事が終了した。

この山に囲まれた里では、大昔から山からの幸で生き、薪炭を生産する人々が、火を尊び、純粋な気持ちで火を信仰してきたんだろうと、勝手な想像をしてみた。集会所に戻ってからまた焚き火を囲んで皆ががやがやと雑談をしながら、あったかい甘酒とお供物をいただいた。普段の生活では味わえない新鮮さと、なにかこころが洗われたような不思議な体験をした。

（肉戸裕行）

1-7. 鞍馬火祭

鞍馬の火祭りに友人に誘われなんとなく参加した。観光客も多いだろうしあまりお祭りは好きでないのだが、これが祭りへの思いを一変させてしまうこととなる。

有名なこの祭りは、鞍馬寺の鎮守社・由岐神社の例祭で、毎年10月22日に行われている。天変地異により世の中が騒然としていた940年に、京都・御所にあった靱（ゆぎ）社を鞍馬に遷宮した際、鴨川に生えている葦で造った松明を持って供奉（ぐぶ）し、道々に大篝（エジ・かがり火）を焚いて迎えた様子

を後世に伝えようとして始まった。

暗くなった午後6時くらいに修学院駅を出発したが、既に鞍馬行き電車はヒトでいっぱいだった。電車の途中から、ちらほら炎が見えだすと、乗客から歓声が上がった。到着して、とりあえず広場のかがり火の前に陣取った。こんな大きなかがり火は初めてで、スケールの大きさに圧倒されてしまう。10m離れていても熱い。そして何より驚いたのは鞍馬駅周辺の全ての家、全ての家族が祭りに繰出であることだ。家々の玄関にはかがり火と防火用の水が並び、子供のいる家には小さい松明が用意してある。（後で知ったが午後6時から「神事に参らっしゃれ！」という神事振れ（じんじぶれ）の音が町に響きわたり、いっせいにかがり火が焚かれたらしい。）

まずは、かわいい衣装に着替えた小さい子供たちが、家ごとに一生懸命トックリ松明と呼ばれる小さな松明を担いで回る。松明は洛北のツツジの柴から各家で作られているそうだ。「サイレーヤ！サイリョウ！」（“祭礼、祭礼”の意味）の掛け声が小さく、お父さんやお母さんに叱られている子供もいれば、大人顔負けの立派な掛け声の子供もいておもしろい。それが終わると小、中、高校生へと続き、松明もだんだん大きくなっていく。いよいよ祭りも終盤になると、青年達がお年よりに見送られながら家から出てくる。一日中飲んでいたのでろうか、家の中にはご馳走とたくさんのビール瓶が見える。

青年達の松明に炎がつく。とにかく大きくて（大きいものは100kg近くあるらしい）4、5人で必死に担いでいると言ってよい。道が狭く、観客にも火の粉が降ってくる、松明も倒れてくる。しかし、ふんどし姿で必死に松明を倒すまいとしている彼らを見ていると、ついこちらも熱くなり、もっと前で見ようと頑張ってしまう。火の粉のパチパチいう音にまみれて、「サイレーヤ、サイリョウ」の声も絶叫に近くなると、観客も町の人も熱気と興奮に包まれる。その後も鞍馬寺の石段ではなにやら儀式が行われているらしいのだが、人が多すぎてほとんど見えなかった。

祭りは真夜中まで続くのだが、クライマックスが過ぎても町並みにはやはりかがり火がともっていて、ひっそりと美しい。どの家も素晴らしい屏風や壺などを、ここぞとばかりに表に向け飾っているので驚かされる。はるか昔からどの家もそろいの衣装や家宝を持っていて、家族で、町じゅうで一つの行事に取

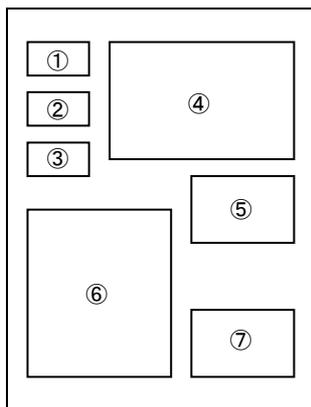
り組んでいるということが、お祭りのない新興住宅地で育った私にはうらやましくて仕方がなかった。

とにかく人が多く、初心者には祭りの進行具合など知るすべもないのだが、とてつもない炎と人々の熱気、そして1000年以上も続いている祭りのスケールを肌で感じられることは請け合いだ。

(成田真澄)



◆写真の説明



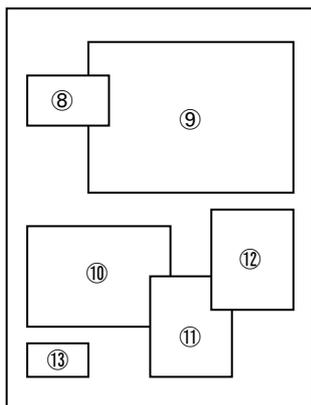
41ページ

大文字送り火

- ① 弘法大師堂でお経が唱えられる
- ② 一斉点火のかけ声があがる
- ③ 大文字からみた妙法送り火の「妙」
- ④ 一気に舞い上がる炎
- ⑤ 間近で見る大文字送り火

妙法送り火

- ⑥ 「妙」の女編の「一」の炎
- ⑦ 燃え上がる炎



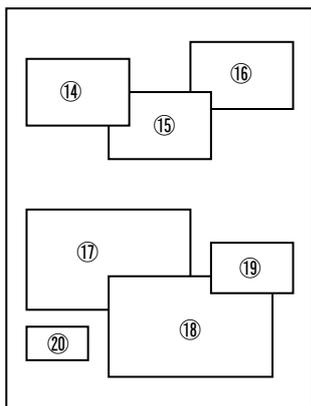
44ページ

芦生松上げ

- ⑧ 抽選大会で大量の景品を当てたおじさん
- ⑨ 点火した直後の様子

久多宮の町松上げ

- ⑩ 地面に叩きつけられた炎
- ⑪ 投げあげられる上げ松
- ⑫ 献灯
- ⑬ 松上げの準備



48ページ

雲ヶ畑松上げ

- ⑭ 「中」の字が浮かび上がる
- ⑮ 松明を持って若衆が走る
- ⑯ 松明を持った人が現れる

二ノ瀬火焚祭

- ⑰ 鞍馬川沿いに松明が連なる
- ⑱ 松明を手に練り歩く
- ⑲ 火のまわりを巫女さんが舞う
- ⑳ 火のまわりに人が自然に集まる

2. 京の火の祭事暦

大文字送り火を取材するなかで、京都には多種多様な火を使った祭礼や行事があることを知った。手元のわずかな資料やインターネットを使って少し調べただけでも、各家庭で行われる「迎え火」や町内単位で行われる「とんど（どんど）」から、京都市街を囲んで催される「五山送り火」まで、その規模は多様で、またその内容も先祖の供養や除災招福の祈願、豊穡への感謝祭、さらには芸能や古式漁法にまで多岐におよんだ。特別な火を焚かなくても社殿や祭壇に灯明を供えるなど、多くの祭礼・行事には「火」はつきものであり、重要な役割を担っていることがうかがえた。

今回、京都各地の火を使う祭礼や行事の中で、大きな火を焚くもの、火が主役のもの、松明や護摩木など森林バイオマスを焚くものを拾いあげてみることにした。しかし、調べだすとつきりがないくらい多数あり、たとえば新春の「とんど」、夏の「虫送り」や「上げ松」、お盆の頃の「送り火」、秋の「火焚祭」などは、形態などに多少の違いはみられながらも各家庭、各町、各地域、各社寺それぞれに受け継がれているものも多く、これら全を拾いあげるのは困難であった。そこで今回は、薪く炭くKYOTOのメンバーが体験した祭礼・行事（*印：1章参照）と一般的に知られているものを中心に、上記のような同様の祭礼・行事が各地で行われているものについては、いくつかの例に限り、その催される月日と場所、一部には簡単な内容を添えたリストを作成した。

なお、祭礼・行事名に添えられた数字は付図の『京の火の祭事絵巻』に示した場所に対応している。

多数の祭礼・行事がもれていると思われる。また、正式名称や催される月日は資料により異なっていたものもあり、必ずしも正確でないかもしれないが、その点はご了承願いたい。

1月

1月15日前後に、各神社や、各地の町内で「とんど」「どんど」「左義長」などといわれる、しめ飾り、門松、古くなった神札、お守りなどを焚き、無病息災、書道の上達

2. 京の火の祭事暦

などを祈願する行事が行われる。

たとえば・・・

① 貴船神社とんど

1月15日 貴船神社 京都市左京区鞍馬貴船町

古くなった神札・お守りなどを感謝の気持ちをこめて焼納し、1年間の安全を祈願する。焼納を前に貴船神社で御神火をいただき、松明に火を移して焼納場所まで持っていく。

② 焼納神事

1月19日 ^{いわしみず}石清水八幡宮 八幡市八幡高坊

15～19日は除災招福を祈願する厄除大祭にあたり、その一環で19日には旧年の御神札、御神札、御守などを焚きあげる焼納神事が行われる。

2月

③ 吉田神社節分祭（^{かろ}火炉祭）

2月3日 吉田神社 京都市左京区吉田神楽岡町

火炉祭は、2～4日の吉田神社節分祭の主な祭儀のひとつ。直径5m高さ5mの巨大な八角柱型の火炉に古いお札が積み上げられ、浄火を点じて焚きあげられる。

3月

④ ^{さが たいまつ}嵯峨お松明

3月15日 清涼寺（嵯峨釈迦堂） 京都市右京区藤の木町

「嵯峨の柱松明」とも呼ばれ、京都の代表的な火を伴った行事。松の枯枝などを藤蔓で結びつけて組んだ高さ約7mの3基の柱松明が作られ、点火される。その燃え方でその年の豊凶を占う。【京都市登録無形民俗文化財】

6月

⑤ 京都 ^{たきぎのう}薪能

6月1～2日 平安神宮 京都市左京区岡崎西天王町

昭和25年より京都の恒例行事として始まった。社殿を背景に篝火が焚かれ、能力が演じられる。

⑥ 青葉祭り

6月15日 ^{ちしゃく}智積院 京都市東山区塩小路通大和大路通東入

6月15日に誕生の真言宗宗祖、弘法大師空海、6月17日に誕生の興教大師の法要で、正式には「両祖大師御生誕慶祝法要」という。法要の後、金堂の前庭にて護摩供養が行われる。

7月

7月上旬～中旬には、各地で「虫送り」といわれる行事が行われる。夜間に松明をかかげて田畑のまわりを練り歩く害虫駆除に由来する五穀豊穣祈願の行事。

たとえば・・・

⑦ 花^{はなせ}脊虫送り

7月1日 左京区花^{やます}脊八桷町

⑧ 久^{くた}多虫送り

7月11日～13日 左京区久多

夜、「デーテイケ、デーテイケ、泥虫デーテイケ、刺し虫デーテイケ、アトスッキリ スットセー、スットスットスットセー」とかけ声をかけながら松明の行列が行進する。

⑨ 静^{しずはら}原虫送り

7月14日 左京区静^{しずいち}市静原町

7～8月を中心に鵜飼いが行われる。船上で篝火を焚き、鵜を操って鮎などの川魚を捕らえる古式漁法。鵜飼見物船が就航していたりする。

たとえば・・・

⑩ 嵐山の鵜飼

7月初旬～9月中旬（日程は年により変更） 京都市右京区嵐山（大堰川）

⑪ 宇治川の鵜飼

6月中旬～9月初旬（日程は年により変更） 宇治市塔の島（宇治川）

⑫ 狸^{たぬきだにやま}谷山 火渡り祭

7月28日 狸谷山不動院 京都市左京区一乗寺松原町

難病退散、夏バテ防止、ストレス解消を祈願して、護摩焚きの残り火の上を素足で渡る火渡り行が行われる。

8月

⑬ 吉原^{まんどろ}の方灯籠

8月16日 舞鶴市吉原

伊佐津川河口の川の中で、魚型の高さ18m、幅4.5mの万灯籠の松明に火が付けられ回される。【京都府登録無形民俗文化財】

14 丹波大文字送り火

8月16日 姫髪山 福知山市奥野部

1951年から始められた大文字送り火で、「大」の字は20m四方で56カ所の火床がある。

京都の夏の風物詩として有名な「五山送り火」は、京都市街を囲む五山で「大」「妙」「法」の文字、舟、鳥居の形に松明が焚かれる行事。一説には精霊送りの一種である万灯会から発展したものといわれている。

五山送り火のそれぞれは・・・

15 大文字送り火 *

8月16日 如意ヶ嶽（大文字山） 京都市左京区浄土寺

【京都市登録無形民俗文化財】

16 妙法送り火 *

8月16日 松ヶ崎西山（万灯籠山）東山（大黒天山） 京都市左京区松ヶ崎

正式には「松ヶ崎妙法送り火」。【京都市登録無形民俗文化財】

17 船形送り火

8月16日 西賀茂船山 京都市北区西賀茂

正式には「船形万灯籠送り火」。【京都市登録無形民俗文化財】

18 左大文字送り火

8月16日 大北山（大文字山） 京都市北区大北山

【京都市登録無形民俗文化財】

19 鳥居形送り火

8月16日 上嵯峨仙翁寺山（万灯籠山・曼荼羅山） 京都市右京区嵯峨

正式には「鳥居形松明送り火」。【京都市登録無形民俗文化財】

8月の中旬～下旬には、柱松明行事の一形態である「松上げ」「上げ松」「揚げ松明」といわれる行事が、若狭街道に沿った山間各地で行われる。多くは愛宕信仰による献火行事として、火除けや五穀豊穰を祈願する行事とされている。「とろき」などと呼ばれる丸太の先端にとりつけられた「かさ」や「もじ」あるいは「はち」と呼ばれる大きな焚き木の詰まった籠に、「あげまつ」などと呼ばれる火をつけた小松明を投げ上げ、点火さ

せるのが多くにみられる形態である。少し異なった形態のものもあり、「城屋の揚げ松明」では、はちに御幣をつけた青竹が立てられ、御幣の倒れる方向により豊凶を占う。また、「雲ヶ畑松上げ」の形態は全く異なり、松明を文字の形をした櫓にくくりつけ点火されるが、その文字は毎年異なり、点火されるまで秘密にされる。

おもな松上げは・・・

⑳ 城屋^{じょうや}の揚げ松明

8月14日 舞鶴市城屋
【京都府登録無形民俗文化財】

㉑ 花背松上げ

8月15日 京都市左京区花背八桝町
【京都市登録無形民俗文化財】

㉒ 久多宮の町松上げ *

8月23日 京都市左京区久多宮の町
【京都市登録無形民俗文化財】

㉓ 小塩^{おしお}の上げ松

8月23日 北桑田郡京北町小塩北
【京都府登録無形民俗文化財】

㉔ 芦生^{あしう}松上げ *

8月24日 北桑田郡美山町芦生
【京都府登録無形民俗文化財】

㉕ 盛郷^{もりさと}松上げ

8月24日 北桑田郡美山町盛郷
【京都府登録無形民俗文化財】

㉖ 殿^{との}松上げ

8月24日 北桑田郡美山町鶴ヶ岡殿
【京都府登録無形民俗文化財】

㉗ 川合松上げ

8月24日 北桑田郡美山町三埜川合
【京都府登録無形民俗文化財】

㉘ 広河原^{ひろがわら}松上げ

8月24日 京都市左京区広河原下之町
【京都市登録無形民俗文化財】

29 雲ヶ畑松上げ *

8月24日 京都市北区雲ヶ畑出谷町・中畑町
【京都市登録無形民俗文化財】

30 ^{こうなし}河梨十二灯

8月23日 京丹後市（旧熊野郡）久美浜町
豊作祈願の伝統行事で、万灯山で高さ12mの雄大な松明柱に点火される。【京都府登録無形民俗文化財】

31 牧山の火まつり

8月24日 船井郡日吉町中世木牧山
牧山の松明とも呼ばれている。長さ4m近くある3本の棒の先に松明が付けられ、扇状に組まれる。松明がよく燃えた年は豊作だとされる。

10月

32 ^{みす}三栖の^{たいまつまつり}炬火祭

10月中旬 三栖神社（御旅所）京都市伏見区三栖向町
壬申の乱の折、大海人皇子が三栖地域を通過する際に地元住民らが篝火を灯して歓迎したことに由来するといわれている。直径1.2mもある松明に火をつけて練り歩く神事。【京都市登録無形民俗文化財】

33 岩倉火祭

10月第3土曜日 ^{いわくら}石座神社 京都市左京区岩倉上蔵町
石座神社の氏子による宮座行事。約8mの大松明2基が点火される。【京都市登録無形民俗文化財】

34 ^{くらま}鞍馬火祭 *

10月22日 ^{ゆき}鞍馬本町（由岐神社）京都市左京区鞍馬本町
朱雀天皇の時代、御所に祭られていた由岐大明神（由岐神社）を鞍馬に移した時、村人が篝火を焚いて迎えたという故事に由来する行事。青年が大小の松明をかかげ町内を練り歩く。【京都市登録無形民俗文化財】

11月

11月は各地の社寺で「お火焚き」「火焚祭」などといわれる、秋の豊穣への感謝や、五穀豊穣、無病息災などを祈願する行事が行われる。

たとえば・・・

35 貴船神社御火焚祭

11月7日 貴船神社 京都市左京区鞍馬貴船町

秋の恵みに感謝する祭事。ロクロヒキリと呼ばれる古来からの道具で火をおこし、約1万本の火焚き串が焚かれる。

36 伏見稲荷大社火焚祭

11月8日 伏見稲荷大社 京都市伏見区深草藪ノ内町

1年間の収穫に感謝する行事で、火焚祭では全国一の規模。3基の火床が設けられ、約10万本の願いが書かれた火焚き串が焚かれ、神楽舞が行われる。

37 新日吉神社火焚祭

11月14日 新日吉神社（宮） 東山区妙法院前側町

五穀豊穣を祈る祭り。火焚串を美しい「ふいご」の形に積み上げ焚かれる。残り火にみかんが投げ込まれ、焼きみかんが参拜者に振舞われる

38 花山神社お火焚

11月14日 花山（稲荷）神社 山科区西野山欠ノ上町

農耕に不可欠な鉄器づくりに由来し、五穀豊穣を祈願する行事。火焚串を美しい「ふいご」の形に積み上げ、焚かれる。

39 御香宮神社御火焚祭

11月15日 御香宮神社 京都市伏見区御香宮門前町

諸願成就祈願のお火焚が行われる。

40 二ノ瀬火焚祭 *

11月16日 左京区鞍馬二ノ瀬町

41 城南宮火焚祭

11月20日 城南宮 京都市伏見区鳥羽離宮町

42 聖徳太子御火焚祭

11月22日 広隆寺 京都市右京区太秦峰岡町

聖徳太子を祖神と仰ぐ建築、建具、機織職などの信者により、数万の護摩木が焚かれ

る。

④③ ^{くるまざき} 車折神社火焚祭

11月23日 車折神社 京都市右京区嵯峨朝日町

④④ ^{ろくそんのう} 六孫王神社火焚祭

11月第2日曜日 六孫王神社 京都市南区壬生通八条町

本殿前で火焚きが行われる。残り火にみかんが投げ込まれ、焼きみかんが参拝者に振舞われる。

④⑤ 恵美寿神社お火焚祭

11月第3日曜日 恵美寿神社 京都市東山区小松町

家内安全、無病息災、商売繁盛を祈願して、境内に組上げられた井桁に点火され、奉納された「片木」が火の中にくべられる。焼きみかんとにがり酒が参拝者に振舞われる。

④⑥ ^{たぬきだにやま} 狸谷山 秋祭り

11月3日 狸谷不動院 京都市左京区一乗寺松原町

秋季大祭。山伏、稚児らによる山内お練り行列、山伏による大護摩供が行われる。

④⑦ 法住寺大護摩供

11月15日 法住寺 京都市東山区三十三間堂廻り町

天狗を先頭に赤、青、黒の3匹の鬼が松明、剣、まさかりを持ち、護摩のまわりを踊り歩く。山伏問答が行われ、大護摩供が焚かれる。

④⑧ 筆供養

11月23日 正覚庵 京都市東山区本町（東福寺山内）

古くなった筆記具に感謝し供養する行事で、筆塚の前で大護摩が焚かれる。

④⑨ ^{じゆす} 珠数供養

11月23日 ^{せきざん} 赤山禅院 京都市左京区修学院開根坊町

全国から寄せられた数珠を焚き上げて供養。

12月

⑤⑩ ^{をけら} 白朮詣り

12月31日～1月1日 八坂神社 京都市東山区祇園町

招福除災を祈願し、「をけら灯籠」の「をけら火」を「吉兆縄」に移して持ち帰り、神前の灯明を灯したり、雑煮をたく火種とする。また燃え残った火縄は「火伏せのお守り」として、台所などに祀る。なお、12月28日はをけら火を、ヒノキの杵と臼をすり合わせて起こす神事「鑽火式」が行われる。【京都市登録無形民俗文化財】

51 ひのみこしゃきりびさい
火之御子社鑽火祭

12月31日～1月1日 北野天満宮 京都市上京区馬喰町

「天満宮のをけら詣り」として知られる。境内の火の神が祀られている火之御子社の「鑽火祭」で起こされた浄火を、無病息災を祈願し、火縄に移して家に持ち帰り、元旦の調理の火種にする。

参考文献

- 馬彌三郎 1972 山溪親書24 京都祭事記 古都の行事めぐり 山と溪谷社
齊藤清明 1992 京都文庫2 京の北山ものがたり 松籟社
久多木の実の会(編) 1993 女性がつづる山里の暮らし. 京都・久多 ナカニシヤ出版
e京都ねっと <http://www.e-kyoto.net/>
石清水/八幡宮 <http://www.iwashimizu.or.jp/>
おいでやす京の奥座敷貴船へ <http://kyoto.kibune.or.jp/>
北野天満宮 <http://www.kitanotenmangu.or.jp/>
社団法人 京都市観光協会 <http://www.kyotojoho.co.jp/>
財団法人 京都市文化観光資源保護財団 <http://www.kyobunka.or.jp/>
京都市文化財保護課 <http://www.city.kyoto.jp/bunshi/bunkazai/>
久多キャンプ場 <http://www2.cyberoz.net/city/kutacamp/>
京北町 <http://www.keihoku-town.jp>
御香宮神社 <http://www.kyoto.zaq.ne.jp/gokounomiya/>
ザ・京都 <http://www.thekyoto.net/>
城南宮 <http://www.jonangu.com/>
醍醐寺 <http://www.daigoji.or.jp/>
タウンナビ京都 <http://www.kyoto-web.com/index.html>
狸谷山不動院 <http://www.tanukidani.com/>
チェックアップ京都 <http://www.cuk.co.jp/>
真言宗智山派 総本山智積院 <http://www.chisan.or.jp/sohonzan/>
発信基地烏帽子山 <http://www2.ocn.ne.jp/~fukuchi/>
日吉町 <http://www.town.hiyoshi.kyoto.jp>
伏見稲荷大社 <http://inari.jp/>
舞鶴観光協会 <http://www.maizuru-kanko.net/>
舞鶴NET <http://www.maizuru.net/index.htm>
美山ナビ <http://www.miyamanavi.net/>

2. 京の火の祭事曆

由岐神社 <http://www.yukijinjya.jp/>

吉田神社 http://www.geocities.jp/kyoto_yosidajinjya/imahyousi.html

(堀本尚宏)



おわりにかえて ～人と火のかかわり～

火を使える唯一の動物は人間であり、他の動物は火を使えないし、火を近づけると恐れ逃げてしまうだろう。

人類が火を使ったことがわかっているなかで最古のものは、焚き火跡などの発見により北京原人（シナントロプス・ペキネンシス：約30万年前）とされている。日本でも縄文時代以前（約8,000年前～約3,000年前）の遺跡には、焚き火の跡とともに炭灰が発見され、縄文文化の遺跡からはかなりの堅さを持つ炭の塊が出土している。

原始時代においては、火は洞窟内での照明と暖房に使われるとともに、野獣の来襲から身を守った。弥生時代前後（2千数百年前）にはいると、農耕や金属などさまざまな技術と文化が大陸から移入されることにより、人間はますます火を多面的に使うことになっていく。国内における金属生産の普及は農業生産性の向上による経済の発展につながり、暖房と保温食の進歩は生活・文化面での発展の原動力になった。

照明や暖房としての火の利用から金属の精錬や鍛冶、製塩、醸造、膠、漆、陶磁器、ガラス等の製造のほか狩猟や開墾や焼き畑、養蚕、除虫等の農耕やあらゆる加工・生産などに火が利用されるようになった。これは現在に至るまで、産業や文化として脈々と受け継がれている。

古代から人間が生きていく上で、火はなくてはならないものであるとともに脅威であった。火の持つ威力とその荒ぶる力により人々は神の姿を見たのであろう。そして火は神聖なものとされ、火をもって神を迎え、神を送る風習や行事が行われてきた。このことは、水、山、田、木なども同じで、「山の神」、「田の神」など現在でも信仰の対象として全国各地に見ることができる。もともと四季折々の自然の中で、暮らしていた日本人は自然を畏怖するとともに自然にあるものすべてを神聖なものとして尊んでいたが、仏教などの宗教と結びつくなどして、いろいろな「信仰のかたち」として変化してきたのではないだろうか。

電気・ガスが普及した現代の暮らしの中では、かつてのように火を使ったり

見たりすることが本当に少なくなりました。しかしながら、京都では「をけら詣り」で年が明け、奈良東大寺二月堂の「お水取り」が終わると関西に春が来る、といわれている。夏には各地で花火大会があり、クリスマスには教会ではキャンドルサービスが行われる。松明、薪、炭、油、ろうそく、火薬など材料は別にして、年中どこかで火が関係する行事が行われている。

ニューヨークのテロ現場で鎮魂のキャンドルが灯されていたニュースがテレビで流されていたのは記憶に新しいが、嵯峨・化野の念仏寺の千灯供養とどこかにかけているような気がした。国境や宗教の枠を越え、なぜ人は、祭礼や精霊を送るのに火を使うのか。人類が火を使った瞬間から、長い歴史の中で人間のDNAに刻み込まれてきたのであろうか。

火に対する信仰は、現在でも京都においても息づく。各地の愛宕講や火祭り・送り火・虫送り等の祭礼や山村の行事として火の祭りが展開されてきた。この火の祭は、霜月から小正月にかけての冬の時期と、盆の行事を中心とする夏の時期に行われるものに大別される。

小正月の左義長は、かつて宮中でもさかんに行われ、庶民の間では「どんと焼き」として親しまれてきた。この行事は全国に広く分布している。これに対して、盆行事として行われる「松上げ」など松明を使った火の行事は府内各地に伝承されている。

今回、我々は、京都で行われている火の祭事に実際に参加させてもらい、その調査結果や体験記などをこの冊子にまとめ上げるうえで、熱源である森林資源、祭りの歴史や担い手のこと、または消費エネルギー量の試算などについて、いろいろな議論を行った。その中で、「人と森林資源のつながり」が希薄になっている現代において、祭事などの伝統行事や文化が、この「つながり」を結ぶ一つの「きっかけ」になっているとともに、今後、森林バイオマス利用などを考えていく上で、ヒントになることがこの中に隠されているのではないかと思った。

いずれにせよ、山の恵みと祭りを支える人々の熱意や努力により、これからも火が人々の心を和ませてくれることは、間違いのないことである。

(肉戸裕行)

